

向日庵



「寿岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」講演録

目次

はじめに

第1回 平成27年8月30日(日) 午後2時～ 向日市民会館・・・・・・2

「近代住宅史から見た寿岳文章邸——寿岳邸の建築史的価値について」 京都市文化財保護課 石川祐一

第2回 平成27年11月21日(土) 午後2時～ 西向日コミュニティーセンター・・・・・・6

「ウィリアム・ブレイクの人と芸術」 京都市立芸術大学名誉教授 潮江宏三

第3回 平成28年2月27日(土) 午後2時30分～ 長岡京市中央公民館・・・・・・14

「民芸運動における寿岳文章先生の貢献」 関西学院大学教授 神田健次

第4回 平成28年6月18日(土) 午後2時～ 長岡京市中央生涯学習センター・・・・・・24

「寿岳章子先生の学問と著作、その他」 京都府立大学教授 赤瀬信吾

第5回 平成28年9月18日(日) 午後2時～ 長岡京市中央公民館・・・・・・32

「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」 甲南大学教授 中島俊郎

第6回 平成29年1月28日(土) 午後2時～ 西向日コミュニティーセンター・・・・・・43

「寿岳文章先生、和紙文化国際化への貢献」 和紙造形作家 伊部京子

第7回 平成29年11月4日(土) 午後1時30分～ 長岡京市中央公民館・・・・・・47

「寿岳潤氏の思い出」 京都大学名誉教授 今井六雄

あとがき

はじめに

本冊子に収録された諸講演は、寿岳文章を中心にして放射された、寿岳家の文化の同心円を描いている。つとに寿岳ご夫妻は『寿岳文章・しづ著作集』全6巻で夫婦を個としたわが国では珍しい文化現象を表していたが、さらに長女、長男というふたつの核が加わり、まぶしいばかりの乱反射を繰り返し、家族という単位でもって新しい文化的な展開をみせ、その軌跡は今日でも人々の脳裏にきざまれ、また心奥に深く宿っている。

歴史的な視座で鑑みれば、向日という田園都市の発展は、その理想とした形態を寿岳家にみるのは何ら不自然ではない。おそらく今後将来、学際的なかたちでこの家族の幅広い業績について多角的に追究されていくであろう。本書の読者は、現にその一端が早くもここに検討されているのを知るにちがいない。

寿岳文章一家の業績を家族という核でとらえた俊敏な批評家は鶴見俊輔であったが、同じ向日の地に居住していたひとりのデザイナー、中村隆一存在を忘れてはならない。鶴見氏が論述のかたちで寿岳家を描いたのに対し、中村先生は一家の業績を研究するところから対象に迫ろうとした。何度も率先して講演会を開き、専門の講師を招聘し、文化的な意義を広く社会に説いた功績は忘れてはならないであろう。

「寿岳文章一家の文化的業績についての調査研究会」という組織を起こされ、寿岳家が発信する文化的な意義を説かれた提唱者であり会長をつとめた中村隆一先生は、自らが先鋭的なインテリア・デザイナーであり、1973年には「ヤマギワ国際照明器具デザインコンペ」で特選を受賞されている。こうした工芸的な眼は、寿岳家が暮らした向日庵の建築的な意義にいち早く着目され、その保存を声高く叫ばれた。同時に先生は京都市立芸術大学名誉教授であられ、後進の育成にも力をそそがれた。また景観問題に対しても一家言をもつ警世家でもあった。ここまで先生の人物像、業績を重ねていくと、おのずと寿岳先生と相似形を描いていることに誰しもが気づくであろう。人が人を知るとはこのことである。「向日の賢人を埋もれたままにさせてはならない」とは、中村先生の名言であるが、これはまた文化の重要性を示唆した提言であるのは言を俟たない。そして、この提言のもと、神脇美千子氏、長尾史子氏、安野洋子氏といった同志が集結し、会は発足したのである。

本冊子に目を落とされる読者は、寿岳家の人々が発する文化的なメッセージについて思いを凝らされ、それらが今日性の問題をもはらんでいることに気がつかれるであろう。そうした思いを共有できればと私たちは、「向日庵」保存の新しい一步を踏み出したのである。

葉桜が揺れる春の日

特定非営利活動法人向日庵 理事長 中島俊郎

「近代住宅史から見た壽岳文章邸 —壽岳邸の建築史的価値について—」

京都市文化財保護課 石川 祐一

1. 近代の邸宅建築

明治以降、西洋建築の移入によって、洋風の邸宅建築が建設される。明治20年代以降になると、大規模な邸宅建築として、接客空間である洋館と生活空間である和館を接続した「和洋併置式」住宅が建てられた。その後、洋館の内部に和室を設ける形式の洋風も現れる。

こうした大規模な洋風の邸宅建築は、主に華族や政財界人などの上流階級の住宅として建てられたものであった（東京・岩崎家住宅、京都・長樂館など）。

2. 中流階級のための住宅の成立

明治の終わり頃より、ホワイトカラーを中心とした「中流階級」が成立すると、彼らのための住まいが必要とされる。これらの人たちは都市で働き、郊外に住もうというライフスタイルを志向することが多かった。これは交通網の整備によって郊外からの通勤が可能になり、郊外住宅地が開発されたことによっている。郊外住宅として、和と洋の外観を有する住宅群が建てられたが、中でも応接空間を洋室とする和風住宅が数多く建てられた。これは明治以来の和洋空間の接続をコンパクトにしたものであり、また、生活改善運動の影響を受け洋風空間を取り入れようとした志向によっている。

この中流階級のための郊外住宅を平面からみると、中廊下式平面（大正初期～）[図1]と、居間中心式平面（大正後半～）[図2]の二つに大別される。前者は中廊下を設けて部屋を通過せずに各室へ行くことが可能になり、プライバシーの確保という点で近代的住宅の一面を持つ。しかし表に応接室や座敷を並べ、内向きは裏や北側に配置するなど家族本位の住宅とはいえない保守的なものである。これに対し居間中心式はモダンリビングといわれるもので、南側の中心に居間を配置し、

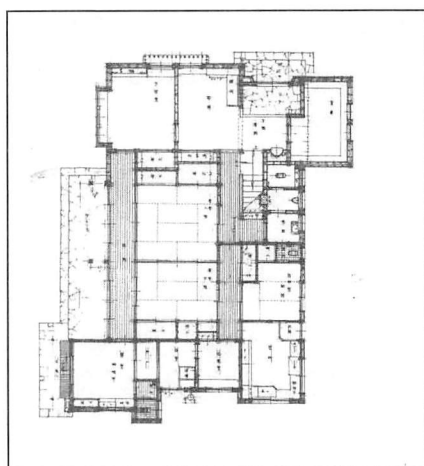


図1. 中廊下式平面（1階）

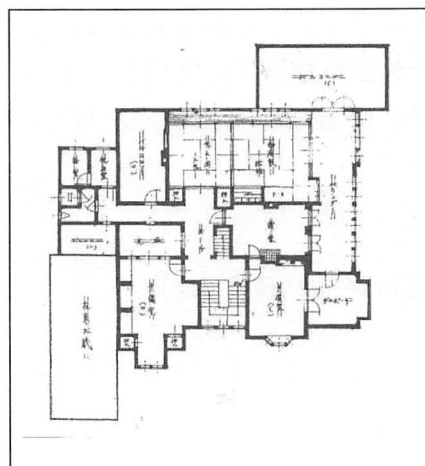


図2. 居間中心式平面（1階）

居間から各室につながる家族生活を中心に据えたものである。こうしたモダン住宅は京都ではアメリカ人の建築家、W・M・ヴォーリズや武田五一、さらに藤井厚二などの建築家によって普及されていく。このような洋風住宅を広く普及させ、新たな需要に応じて供給するのは建築家ではなく、工務店・大工の役割であった。京都では、この郊外住宅を中心的に担ったのは、京都あめりか屋と壽岳邸の建築にもあたった熊倉工務店であった。

3. 熊倉工務店

熊倉工務店は熊倉吉太良（1894-1982）によって会社の基礎が築かれた。棟梁として三高・京都帝国大学の施設施工に参加し、これを契機に京大建築学科の人脈とのつながりを持った。大正9（1920）年、建築学科を創設した教授の武田五一（1872-1938）をはじめ、藤井厚二（1888-1938）、永瀬狂三（1877-1955）、壽岳邸の設計にあたった澤島英太郎（1904-1945）などの建築家グループとの交流を通して彼らの住宅建築の作風を吸収した。

大正末期以降、熊倉工務店はアールデコやスパニッシュ、チューダー様式などの当時流行の様式を取り入れ、施主の要望に沿って、多様な新しい和風・洋風住宅を供給していった。熊倉吉太良は藤井厚二に心酔していたとされ、藤井風の作風を多くとりいれている。

また、熊倉は民芸運動に共鳴し、民家風、民芸風の住宅を施工している。吉太良と民芸との出会いは陶芸家で民芸運動の主要メンバーである河井寛次郎と住まいが近く、親交があったことによる。河井邸（現河井寛次郎記念館）の囲炉裏の意匠の影響を受けた民芸風の住宅も多い。

4. 壽岳文章邸の建築

壽岳邸は昭和9（1934）年竣工、設計は前掲の澤島英太郎、施工は熊倉工務店である。澤島は師匠の武田五一を通じて熊倉との交流があった。様式は先の中廊下式平面の郊外住宅を踏襲しているが、書庫と書斎を北側に配置しているため、やや変則的である[図3]。意匠的には藤井厚二の影響と、民芸運動の影響を受けている。

藤井厚二は、単に西洋建築を摸するのではなく、日本の風土に適合した新しい近代住宅を建てようとしていくつかの実験住宅を建てた。現存する大山崎の「聴竹居」は数寄屋風という日本建築のアイテムを用いながら近代的洋風空間にアレンジしている。これが藤井の特徴的な手法である。壽岳邸の外観[Ⅰ]も藤井厚二風のデザインが色濃いと見える。

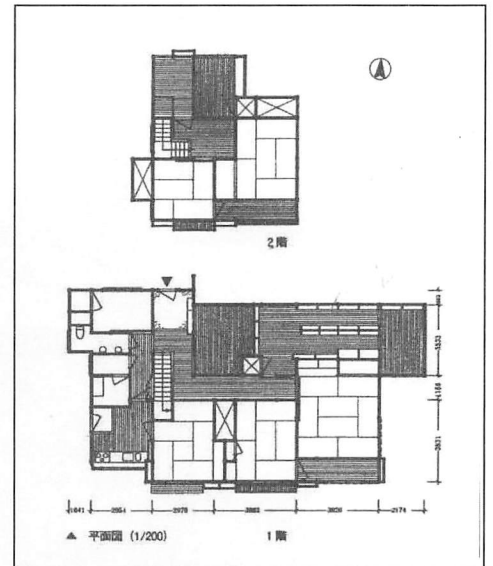


図3. 壽岳邸平面

澤島英太郎も藤井の影響を受けており、壽岳邸のいたるところにそれをみることができる。玄関から入ってすぐ左の応接室の床の間[Ⅱ]、座敷の違い棚[Ⅲ]はともに藤井のデザインの影響が強い。とくに珍しい窓つきの違い棚は、通気や採光に配慮した藤井の住宅環境学を生かしている。これはまた書庫[Ⅳ]にも見られ、北側に配置して、上の欄間に通気・換気の配慮がされている。

壽岳氏は、自宅の建築にあたって民芸に関する意匠的趣味を反映させなかったといえる。後に『私

と民芸品』(1980年)のなかで「民芸を意識しないで建てた家でも、家具や調度品に民芸品を入れ、三十年の風雪に耐えると、どことなく民芸的な格ができる」と見え、私の家にやってくる人は、純粹の民芸の暮らしに徹していると思うらしい」と書いており、単に民芸風の意匠を用いるということではない民芸観をかいま見ることができる。

5. 壽岳邸の建築史的価値

壽岳邸の建築史的価値として、次の点をあげることができる。

(1) 大正から昭和初期につくられた、中廊下式平面を持つ郊外住宅の一つとして位置づけられる。

(2) 意匠や建築環境への考え方(通風、換気など)の設計において、建築家・藤井厚二の影響を、色濃く受けている。

(3) この背景には建築家と工務店とのコラボレーションがある。施工の担い手である工務店が建築家との交流によって作風や設計スキルを吸収して、一般に普及させていく役割を果たしている。

(4) 民芸運動の視点から、重要な住宅である。民芸運動が展開した場であるとともに、内部意匠や調度品には、施主である壽岳文章の民芸観があらわれている。

(5) 「文化人」壽岳文章の邸宅としての歴史的・文化的価値を有する。文化活動の場としての価値に加え、著述家の住宅として書庫の空間が付加され、資料の保存のために通風・換気に配慮した設計がなされている点に建築的な特徴が見られる。

このように、壽岳邸は、様々な切り口からアプローチすることのできる住宅建築である。



I. 壽岳邸(向日庵)



II. 応接間



III. 座敷・違い棚



IV. 一階書庫

(文字起こし、長尾史子)

参考文献

石川祐一『近代建築の夜明け 京都熊倉工務店—洋風住宅建築の歴史』(淡交社 2006年、共著)

壽岳和子『地上の星座 壽岳潤追悼集』(2012年)

注

- * 図面は石川氏上掲書・図1は山内邸住宅、図2は河合邸住宅、図3は講演資料より。
- * 写真Iは石川氏上掲書、II～IVは壽岳和子氏からの提供による。

本講演の一部は、『乙訓文化遺産 20号』(乙訓の文化遺産を守る会 2016年1月発行)に掲載されている。

「ウィリアム・ブレイクの人と芸術」

京都市立芸術大学名誉教授 潮江宏三

1. 日本におけるブレイク受容の展開のなかでの寿岳文章の役割

私は大学時代からずっとウィリアム・ブレイクと関わってきました。ただ、それまでのブレイク研究者とは異なり、美術史という立場からブレイクを研究しており寿岳先生と少し視点やポジションが違います。

ただ今回お話しするにあたって、寿岳先生のお仕事や細かい内容にまで触れることはできませんが、概括的に研究者として、先生がおおよそどのような位置におられたのか、ということをご紹介したいと思います。それを皮切りにブレイクの芸術について簡単に触れていきたいと思います。

資料「ウィリアム・ブレイク略伝」と資料「日本におけるブレイク受容の展開のなかでの寿岳文章の役割」をご覧ください。略伝にありますように、ウィリアム・ブレイクは1757年、ロンドンの職人階級に生まれ、1827年に亡くなっています。ちょうどヨーロッパが大きく変貌するフランス革命をはさんで生きた人です。その中でフランス革命に対して、自分はどのように生きるのかという問題をたえず真摯に考えて、それを糧に詩を書いた人です。詳細はあとでふれましょう。

後者の資料は、京都大学で「国際ブレイク研究会」なる学会が開催されて、その折に京都大学の博物館で展覧会を開催しました。その展覧会の目録に基づき作成しました。私も関与していますが、主として私どもの美術館（京都市立美術館）の学芸員、後藤氏が大半を編集いたしました。ここにあげた年表などは後藤さんが作成したものです。では概略をかいつまんでお話しします。

ブレイクは1827年に亡くなっていますが、日本でブレイクの紹介が初めて行われたのは1893(明治26)年です。そのあと1895(明治28)年には上田敏、ラファディオ・ハーンという文学者、特に上田敏はブレイクの詩を翻訳しています。岡倉天心、夏目漱石も含め、詩人、木下杢太郎もブレイクに言及し、それから坪内逍遙、そういう人たちが伝記を紹介しています。蒲原有明、小野竹三、三木露風、岩野泡鳴などもブレイクの詩を翻訳しました。ただし、これらは多くの場合、ブレイクの初期作品 *The Songs of Innocence and Experience* (『無垢と経験の歌』) からの翻訳が大半で、あと処女詩集 *Poetical Sketches* (『詩によるスケッチ』) を紹介するくらいの域しか出ませんでした。実は後半期の預言書と呼ばれる長い文章で書かれた作品は、難解きわまり翻訳できず、紹介もされていません。ここに挙げていませんが、戦後、評論家でもあり翻訳家の福田恒存が翻訳をしています。後期作品の翻訳は難物で、内容の解釈が大前提となりますので、すぐに翻訳には着手できません。単純に日本語にうつすという問題ではないからです。

そうした状況で1910(明治43)年、雑誌『白樺』が創刊され、1912(明治45)年に柳宗悦がブレイク研究に着手し、それから二年後、1914(大正3)年、『白樺』4月号でブレイク特集がなされました。この特集号はブレイク研究のうえで決定的な役割を果たします。白樺世代の人々はこの特集号を

通してウィリアム・ブレイクを知り、やがて関心が集まりました。

その後、英文学者の山宮允が本格的な研究者として参加する一方、柳宗悦は『キリヤム・ブレイク―彼の生涯と製作及びその思想』という大著を出版してその影響力は決定的なものとなります。

年表の右側に書いてあるのは画家の仕事ですが、面白いことに土田麦僊に理屈っぽくて、オーソドックスで古典的な影響がみられ、それから岸田劉生は当然、白樺派と近かったので、若き日の作品（《麗子像》の発表以前）にウィリアム・ブレイクの影響を強くうけた作品を描いています。

そしてブレイク受容のうえで大きな転機は、1915(大正4)年、白樺主催による第7回美術展覧会でした。それまでは白樺派の役割は詩、文学など言語上のブレイクの紹介に終始していましたが、柳宗悦を通してはじめてブレイクの詩に代わり粗末な複製画でしたが、その絵画作品が紹介されたのです。それが東京（日比谷美術館）と京都（京都府立図書館）の2ヶ所で開催されたました。

資料の次ページに移りますが、この頃に東京の岸田劉生の《カチカチ山と花咲爺》を別にすれば、京都の画壇では麦僊以外に、村上華岳の《聖者の死》、入江波光の《降魔》という形でブレイクの影響が作品に反映されます。とりわけ《聖者の死》と《降魔》はちょうど1918(大正7)年に京都、あるいは日本美術史に欠かしてはならない「国画創作協会」(国画会)が結成された年であり、村上も入江も「国画会」の主要メンバーでしたので、また土田麦僊もそうですから、この人たちはブレイクの洗礼を受けるところから、画家として仕事をはじめています。もちろんブレイクだけでなく、ゴッガン、セザンヌなどからも影響を受け、自らの新しい日本画に着手していったのです。

こうした風潮のなかでブレイクが少しずつ浸透していきますが、やがて1922(大正11)年から1923(大正12)年にかけて、土田も、入江も、国画会の有力メンバーがそろってヨーロッパへ遊学します。それを契機としてウィリアム・ブレイクの影響が、まるで「つきもの」が落ちたごとく見えなくなってしまいます。つまり雑誌『白樺』という限られた範囲内でしか情報が入ってこなかったために、ブレイクしか見えていなかったのです。彼らがヨーロッパ美術全般を体験するに及び、急速に視野が広がり、自分たちの芸術的な志向に従っていくわけです。そうしたなかで唯一、ブレイクを信奉し続けた画家こそ村上華岳でした。

そのうちに英文学者、山宮允がブレイクの翻訳、訳注を世に問い、柳宗悦が京都、同志社大学でブレイクの講義をして、徐々にではあるが確実に影響が広がっていきます。幡谷正雄、土居光知という英文学畑のブレイク研究者も活躍しました。

記念すべきことに、京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）で1927(昭和2)年、柳も参加して、ブレイク没後百年記念の講義を行っています。卒業生であった村上、入江、土田という画家たちは、ブレイクに深く傾倒していました。この没後百年を記念して幡谷も展覧会を開いたのですが、京都博物館では、柳、山宮、寿岳文章三者が共同で「百年忌記念ブレイク作品文献展覧会」を開催しましたが、これは京都文化にとり重要な意義をもたらしました。ここで初めて寿岳文章氏の名前が出てくるわけです。京都大学を出て直後のこと、展覧会で柳のサポートをする形で寿岳先生のブレイク研究のデビューがなされていたわけです。

寿岳文章氏はとくに書誌研究、ブレイクの文献等に関する研究に没頭され、そうした研究成果が二年後の1929(昭和4)年、『キリヤム・ブレイク書誌』として結実しました。そして「ブレイクの画論」という先生の論考が京都市立芸術大学の同窓会誌『美』に紹介されています。(実は私がこの雑誌をなぜ所持しているかと申しますと、若いころに私が『ウィリアム・ブレイクの素描』という

単行本を出しましたが、当時、同大学で日本画を専攻していた大野俣嵩先生がウィリアム・ブレイクに心酔されていて、そこに序文も寄せて頂いて、大野先生が関心を持っている作品も論じた次第です。そういうご縁からこの会誌を頂戴したわけです。)

この展覧会を通じて寿岳氏もブレイク研究と紹介に参画することになり、ちょうど 1920 年代末から 1930 年代にかけての戦前の困難きわまる時代に研究に従事したということになりましょうか。

そして寿岳氏の足跡の中で、もっとも重要なのは、私家版出版を実践されたことです。私自身はいまだに実物を見る機会に恵まれていないのですが、たとえば、寿岳さんの私家版の仕事に訳詩書『唯理神之書』というものがあります。これはただ理性だけの書という意味ではなく、私は『ユアリズンの書』と訳していますが、ブレイク神話の中に出てくる「合理性と支配の神」、これを「ユアリズン」というのですが、そういうものについて書いた預言書があって、それを先生は翻訳して、その挿絵を復刻し本として復元したわけです。要するに精巧な複製本をつくったわけです。1927 年にブレイク百年忌がめぐり来たわけですが、ヨーロッパではすでに精巧な複製がつくられていました。今日のような印刷技術が発達していない時代にはリトグラフを使用し、さらに手描きで彩色をしていました。そうして複製の感化を受けて、寿岳氏もまた複製をつくろうと志して最高の和紙を使って美しい本を生み出したのです。その結果として同時に和紙研究にも関心をもつようになりました。

さて、つづいて『無染の歌』（『無垢の歌』）、初期の彩色本ですが、『無明の歌』、『永遠の福音』などの複製本を陸続と先生は刊行していきます。

ここから年表が飛んでいます。残念ながら私自身がほとんど資料を持ち合わせていないからです。私が若い頃に直接的なかたちで寿岳氏に触れたのは、ダンテの『神曲』を翻訳されて、それにウィリアム・ブレイクの挿絵を組み合わせる三巻本で集英社から出された時でした。当時、ダンテを通してブレイクをみるということはほとんどできなかったもので、そういう意味では非常に助かったわけです。全体で 100 点あまりになりますが、京都大学図書館に白黒のファクシミリが所蔵されているだけで、実見できませんでしたが、先生の『神曲』の出版により容易に見ることができるようになりました。さらに厄介なのは、中期の作品として 537 枚に及ぶ水彩画による『夜想』がありますが、これは 1984 年まで全面的には研究者に紹介されていませんでした。研究もまだまだ進行状態で、その他まだわかっていないことが多々あります。近年の一大事件としては『墓場』というロバート・ブレア詩集のための挿絵を描き（1805 年）、その銅版画を他の彫り師が彫ったのですが、散逸していたブレイクが描いた下絵がこぞって出てきたという大発見がありました。

結論的に申し上げますと、寿岳文章氏が果たされた役割は、柳宗悦が追究したブレイク紹介を受け継ぎ、詩と絵画を融合させてブレイクを忠実に紹介されたことではないかと思えます。ブレイクのそうした両芸術を融合させた仕事の紹介という点において、寿岳先生のお仕事はきわめて重要なもので、もし仮に向日庵で出版された本がいずこかに残っているとすれば、じつに貴重なものではないかと信じます。つまりブレイク紹介者としての誠実な努力は尊いものではないかと思う次第です。俯瞰すれば寿岳先生のブレイク研究は以上のような位置づけになりましょうか。

2. ウィリアム・ブレイクの人と芸術

概略的に考えて、ウィリアム・ブレイク研究は、日本においても欧米でも、詩から入っていく場合が非常に多いです。ブレイクを最初に全般的に紹介したのは 19 世紀半ばの英国のラファエル前派でしたが、その周辺にいた人が初めてブレイクについての伝記を書いています。ブレイクのあまた残された水彩画にタイトルをつけ、基本的な解釈を施したのは、ラファエル前派の中心的な人物、美術批評家であるウィリアム・マイケル・ロセッティでした。ラファエル前派は絵画、文学も合わせて重視するという視座でしたが、次第にブレイクの詩が重視されるようになっていきました。また、ウィリアム・ブレイクの絵画はおおよそ英語圏にあり、とくに日本みたいな遙か彼方では、細々とした複製を見るしか仕方がなかったわけです。ゆえに詩作品からブレイクに入っていくのは当然の経路であったのです。

実は 1957 年の半ば頃に、ニコラ・ブッサン研究で有名なアンソニー・ブラントという研究者が *The Art of William Blake* (『ウィリアム・ブレイク研究』) を出します。この研究書を嚆矢として、いわゆるブレイクの芸術を単独で説明するのではなく、ヨーロッパ芸術の伝統の中で、ブレイクの絵画芸術がどのような位置を占めているか、という研究が始まっていきました。そこから実は、ヨーロッパ、日本を問わずブレイクの美術史的研究が本格的に始動していったといえましょう。ですからそれほど過去からではなく、研究史としてはいささか浅いわけです。私も若いころにその本に出会って勉強し始めていて、これが重要なターニングポイントになりました。

最近はいろんな伝記的な事実や資料もたくさん出てきていますので、今までとは違ったブレイク解釈が多様に提示されているという状況にあります。

あとはウィリアム・ブレイクその人について簡単にお話をしていきたいと思います。

先ほど紹介しましたように、1757 年にロンドンで生まれています。父親はホイザー（ニットの下着を扱う仕事）、長男は家業についたのですが、彼は小さいときから絵が好きで、絵ばかり描いていたので、父親は懸命に貯蓄してウィリアムをバースにある素描学校に通わせます。当時、この素描学校は基本的には物づくりの職業の基本的なデッサンを勉強するところであると同時に、アカデミーに入学するための予備校という二つの役割を兼ねていました。

学校の主催者の弟であるウィリアム・バースという人が、必ずしも自分自身の意思ではなかったのですが、ソサエティ・オブ・アンティークイティ（「古物研究協会」）というところから派遣されて比較的早い時期からギリシアに行っています。ギリシアでのデッサンを持ち帰り、おそらくこの時にブレイクはそれを見ているわけで、ロマン主義者といわれているブレイクですが、意外なことに古典的な作品にも触れています。

しかしブレイクは画家になりたかったのですが、経済的な状況が許されないうえに、職業的な可能性として銅版画師という仕事が開かれはじめていた時代で、その結果として、彼は自分の仕事を、妥協しつつ銅版画師という職業を選びました。ジェームズ・バサイアのもとで徒弟となり、6 年間に及ぶ徒弟仕事に従事します。

1779 年に徒弟期間が終わりますが、心残りがあつたらしく、実は自分は絵描きになりたかったということの思いだし、ロイヤル・アカデミーに入学します。しかし、半年で学校を辞め、1780 年に銅版画師として工房を開き仕事をはじめます。このように生活の資をかせぐわけですが、銅版画師という仕事は、原画をもらってそれを銅版に彫るという独創性を必要としない仕事です。複製版画

師という職業なのです。

1782年、キャサリン・ブッチャーと結婚し、書き貯めてあった作品を集め詩集 *Poetical Sketches* (『詩によるスケッチ』)として出版します。ブレイクはいくつかの本を書いています、活字で出版した詩集はじつはこれだけなのです。これが最大の特徴で、出版社を通して自分の作品を出版するのではなく、彩飾本という形式で自分の著作をことごとく出版しています。それは手刷りの版画です。この「彩飾本 (illuminated books)」は、通常言われているのですが、ブレイクは中世の彩飾写本を見る機会があり、つまり『ベットフォードの祈禱書』がフランスからイギリスに到来し、イギリスの本屋の尽力により公開されました。その折にブレイクはおそらく見たのだろうと言われていいます。それに基づいて白黒の線だけの絵ではなく、色彩のついた挿絵をつくろう、その際に、手描きだけではなく、版画を基本にしてデザインをつくって、その上に彩色をして本をつくろうとしました。これが「彩飾本」にほかなりません。この時に新しい技法を開発しています。これこそが凸版の銅版画です。通常、銅版画は凹版ですが、凸版は余分な部分を酸でことごとく除去し、残った部分に木版と同じく、インクを乗せて刷る。さらにその上に手彩色していくゆえ彩飾本は各々仕上がりが異なるというわけです。それが最大の特徴でしょうか。

3. 資料の一覧にある彩飾本について

ブレイクの特徴は、初期作品は当時の出版物と併走しながら出版されていますが、1790年頃に出された『天国と地獄の結婚』あたりから、少し調子がやや違ってきて、最後の『アルピオンの娘たちの幻想』、『アメリカ』、『ヨーロッパ』では何を表現しているかということ、アメリカ独立戦争からフランス革命に至る社会変化をブレイクが神話的に解釈して描いているのです。しかし、そうした時代動向だけでは、人間の歴史の必然性は理解できないとして、ブレイクは再度、人類歴史を根底から考え直してみようとして試みたのが、『ユアリズンの第一の書』に他なりません。世界は誤れる神によって創造された、よってこの誤った現世があるというのがブレイクの考え方です。そのあと、そういう世界を誰が立て直すか、人間のうちのどのような力でもって立て直すか、それを擬人化して書いたのが、『ロスの歌』、『アハニアの書』、『ロスの書』です。ここで、1795年の時点でブレイクはこうした革命的な態度で書き続けることに疲弊をおぼえ、さらにこういう自己の仕事に集中するあまり、銅版画家としての仕事から遠ざかってしまい雇用の機会も減り、やがて収入の道が閉ざされていきます。そうした事情ゆえ、1795年以降、ブレイクにとっては困難な時代に入っていくをえませんでした。

ブレイクの生涯を通して考えるときに、そうした苦境を救ったのが、1799年から着手した、トマス・バッツという生涯にわたる支援者が委嘱した聖書画制作でした。聖書の挿絵を描くことで、もう一度キリスト教思想でもって世界をどのように救済するか考え直そうとする方向が少しずつ開けていくのです。これが大きな転換期となり、以後、『ヨブ記』、さらに『ミルトン』、『ジェルサレム』といった偉大な預言書へとつながっていきます。そこにはキリスト教思想を根幹にしながら、大きな神話的枠組みのなかでいかに人間が救済されるか、そういった物語が紡がれていきます。その時にもっとも重要な要素はアートです。アートとイマジネーションつまり芸術と想像力です。これが重要な因子であるわけで、そうした観点からすればブレイクは典型的なロマン派の芸術家であると

いえましょう。

そして最後のダンテの『神曲』の挿絵集、これは未完に終わりましたが、ブレイクはベッドに横たわりながら、これを描きつつ最後は天国の歌を歌いながら亡くなったのでした。葛藤を繰り返した人生でしたが、本人自身はそれほど不幸ではなかったかもしれません。

では、以後はブレイクの美術的な仕事を瞥見していきましょう。

4. ブレイクの美術——スライド

① 銅版画作品

ここでは、ブレイクが生活の糧を得る職業であった銅版画師としての仕事を見ていきましょう。銅版画師と言っても出版物のための複製銅版画を制作することが主体であって、創造的なことは求められていませんでした。彼はこの仕事でエッチング、エングレーヴィング、スティブル技法（点刻）を習得して、主題・目的に合わせて用いましたが、「線」を重視する彼の芸術観もあって、最も線の力が発揮できるエングレーヴィングの方に関心が向いていきます。それとともに、銅版画におけるオリジナル表現を目指し、16世紀の銅版画の技法と表現を体得して行くようになります。18世紀の職人らしい初期の銅版画から晩年の傑作、『ヨブ記』の銅版画集までの展開を紹介します。

② 彩飾本 (illuminated books)

ブレイクは銅版画師という職業からエッチング技法を展開させた新たな銅版画技法、凸版の銅版画を発想します。この印刷技法で挿絵・装丁、さらにはテキストを一枚の版に作り、それを刷って（色刷りもあり）、さらにそこに手彩色をするという方法で、1780年代末頃から、自分の著作を私家版で出版します。じつは、詩人ブレイクの仕事は、ほぼすべてがこの本の形式で出版されているのです。そう考えると、詩篇に施された挿絵やデザイン性を鑑賞せず、詩のテキストのみを読みブレイクを理解したとする作業は、誰がみても片手落ちと感じるでしょう。ブレイクは、こうした本を西洋中世の彩飾写本にちなんで「彩飾本 (illuminated books)」と呼んでいます。ここでは、その「彩飾本」の展開を概略していきましょう。

『すべての宗教は一つである』、『自然宗教は存在しない』、『無垢と経験の歌』、『セルの書』、『天国と地獄の結婚』、『アルピオンの娘たちの幻想』、『アメリカ』、『ヨーロッパ』、『ユアリズンの書』、と続く過程の中で、この版画の印刷法が、厚塗りの絵具を転写するという方向に変貌して行き、そこからブレイクの中期の傑作「彩色版画」が誕生する経過も検討していきたいと考えています。

③ 絵画

ここからは、彼の絵画作品を見ていきます。特に、ブレイクが大いに期待していた「フランス大革命」から起るはずであった価値のうえでの大転換、あるいは「世直し」が空振りに終わってしまいました。ブレイクは精神的に苦難の時期であった世紀の転換期に、自らの思想の原点である「聖書」を主題として自覚的に絵画制作を始めました。まず、テンペラ画で連作を制作し、水彩画でも連作を制作します。これを契機に、ブレイクは、自分の宗教観をもう一度見つめ直すわ

けです。

そうした体験を前提に、ブレイクは蘇りと救済の道筋を「芸術＝想像力＝キリスト」の中に見出していきます。そうした彼の精神的変遷の過程は、晩年の彩飾本『ミルトン』、『ジェルサレム』の中で、神話仕立てで語られています。これについても簡単に触れておきましょう。そしてブレイク最晩年の未完の傑作、ダンテの『神曲』挿絵集に触れて、彼が理想としていた絵画表現の在り方がそこに具現されているのを検討しておきましょう。

* * *

ブレイクは肝臓病であったといわれ、齢 70 歳で亡くなりました。生涯をたどりながら、主だった作品しか言及できませんでしたが、多くの作品が残されていて、残念ながら、全部をお見せするわけにはいきません。銅版画家として出発しながら、水彩画、テンペラ画をも手がけて、そして独自の銅版画技法と印刷方法を開発していった人です。そういう側面から申し上げますと、けっして観念、思想において偉大な芸術家であっただけではなく、アーティストとしての技術的開発にも積極的に取り組んだ芸術家であった人間であったのをご理解いただければうれしく存じます。

最終的にブレイクがめざしていた芸術的な境地は、16 世紀のルネサンス芸術を原点としていました。ブレイクは一度もかのイタリアの地を踏みませんでした。イタリアへの憧憬から自己の芸術を形成していったのです。版画であれば、原点であるエングレーヴィング（彫刻）にたえず立ち返り、生涯をかけてそれを追究しました。若い頃、世間の中で身についた世俗の垢を徐々に落とし、清めつつ、純粹なものにいつも立ち返っていくという生き方をつらぬいた人間ではなかったかと思えます。

(文字起こし、長尾史子)

資料(1)

ウィリアム・ブレイク (William Blake) 略伝

- 1757 年 11 月 28 日、ロンドンで生まれる
- 1767 年 パースの素描学校に通い始める
- 1772 年 銅版画家ジェームズ・バサイアの徒弟になる
- 1779 年 修業期間を終え、ロイヤル・アカデミーの学校に入る
- 1780 年 銅版画家としての仕事を始める
- 1782 年 キャサリン。ブッチャーと結婚
- 1783 年 最初の詩集『詩によるスケッチ』を出版
- 1788 年 彩飾本の形式で自分の詩集や著作の刊行を始める
- 1793 年 彩飾本によるランベス預言書群の刊行を始める。
- 1795 年 モノタイプの大色彩版画連作を制作
- 1797 年 水彩画挿絵集に基づきヤング著『夜想』銅版画挿絵本を出版
- 1799 年 テンペラ画による聖書画を試み、その後水彩でも描く
- 1804 年 思想。芸術の集大成である預言書『ミルトン』(-09?)と『エルサレム』(-20)に着手 この間『ヨブ記』やミルトンの著作等を水彩で描く
- 1809 年 兄の家で個展。この頃にブレイクの芸術思想が明確な形をとる
- 1818 年 風景画家リネルを中心に若い支持者が集まる

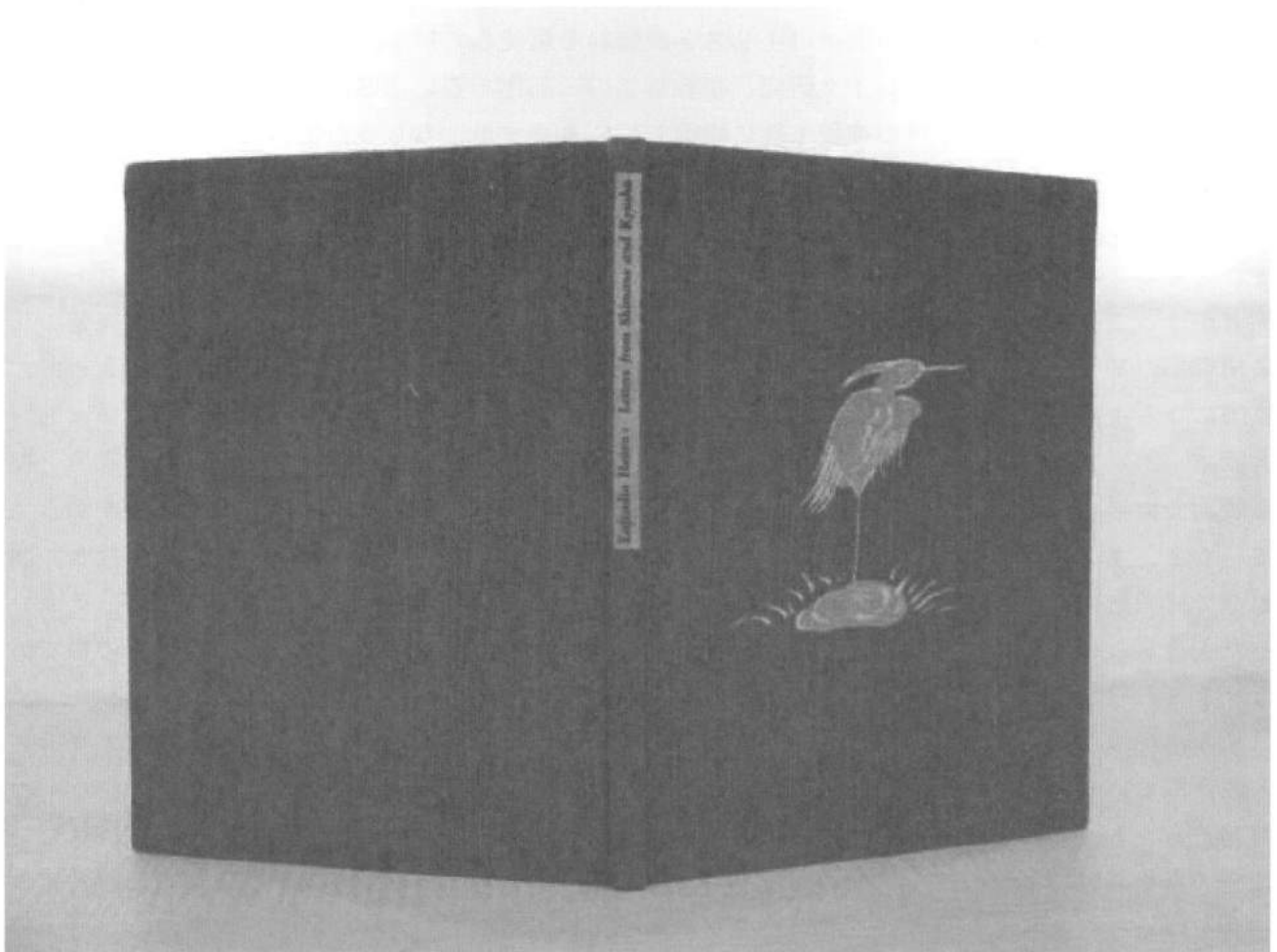
1823年 リネルの依頼で『ヨブ記』の銅版画集に着手
1825年 ダンテの『神曲』挿絵集(未完)に着手。並行して銅版画も制作
1827年 8月12日 没

彩飾本による著作

『すべての宗教は一つである』(1788年頃) 『自然宗教は存在しない』(1788年頃) 『無垢の歌』(1789年) 『無垢と経験の歌』(1794年) 『セルの書』(1789年) 『天国と地獄の結婚』(1790年頃) 『アルビオンの娘たちの幻想』(1793年) 『アメリカ一つの預言』(1793年) 『ヨーロッパ一つの預言』(1794年) 『エアリズンの第一の書』(1794年) 『ロスの歌』(1795年) 『アハニアの書』(1795年) 『ロスの書』(1795年) 『ミルトン詩』(1804 - 1810/11年) 『エルサレム 巨人アルビオンの流出体』(1804 - 20?年)

資料(2)「日本におけるブレイク受容の展開の中での壽岳文章の役割」(省略)

小泉八雲『島根九州便り』(向日庵本)



「民芸運動における寿岳文章先生の貢献」

関西学院大学教授 神田 健次

はじめに

関西学院大学神学部の教師をしています神田健次です。

趣旨をおうかがいして大切なことだなと思いました。大変尊敬している寿岳先生ですので、私は民芸運動を中心にずっとやってきたわけでは必ずしもないのですが、研究のつながりでここ 20 年間、いろいろな所を歩き、日本民藝館など見学させていただき教えていただきながら考えたことをお話しします。

私の問題意識は、戦後に出た『民藝』で、仏教的視点からの柳さん（柳宗悦）の特集をやっています、大変感動いたしました。それは非常に大切な視点であると思っています。ただ、私の視点は、白樺派の流れ、その前から柳さんのお仕事をたどっていて、どうもキリスト教の色彩が非常に強いのです。特に内村鑑三からの影響ですね。志賀直哉、有島武郎もそうですが、そういうつながりの中で、あとでみんな離れていくわけですが、柳さんだけが、同人誌『白樺』創刊号に神学論文を書くのです。独学で当時の欧米のキリスト教資料を駆使して神学論文を書くという、記念すべき第一号です。これが後のブレイク研究、宗教哲学の三部作あるいは四部作の非常に重要な視点になっていると思います。中世の神秘主義に傾倒していきませんが、もちろん仏教的な視点もありますが、どちらかというと、初期は『工芸の道』に至るまでは、キリスト教の色彩が非常に強いのです。それが、私の基本的なテーゼです。

なぜそのことにこだわるかという、よし悪しは別にして、民芸運動の展開の中にキリスト教関係者がけっこう多い。倉敷民藝館の初代館長の外村吉之介先生は、実は関学の神学部の大先輩で、最初京都のYMCAの主事をされていて、そこで関東大震災で京都に来られた柳先生と出会って、牧師になる決意ができたのです。これは通常あり得ないことです。或いは大原親子（大原孫三郎、大原総一郎）、ICUの初代学長、湯浅八郎、朝鮮の工芸を柳さんに教えた浅川伯教・巧兄弟も、型染版画で世界的に著名な渡辺禎雄もキリスト者であり、どうも仏教的なイメージよりも初期から見ると、キリスト教的な色彩が強いのです。とくに柳さんが京都に来られてから、同志社との関わりで村岡景夫、同志社の神学部教授だったのですが、〈こぎん〉の研究で有名な方ですが、そういった人達がなぜ運動に参加していったのか、これを解くためにやはり柳先生の、その歩みの中で、なぜそこに惹きつけられていったのかを見ていくのが、私の関心なのです。

私の出身地は新潟県の新発田市で、熱心な浄土真宗の地ですが、信仰の構造が浄土真宗とキリスト教は似ているところがあり、柳さんがシフトしたのはそんなに不思議ではないと、そういう一つの考え方をもっています。今の時代に宗教は対立しあうものでなく、共存し対話しながら、新しい課題、平和の課題などのチャレンジを受けて共に担っていけるということで、私は他の宗教者との学会をつくったりして、そういう問題意識でやらせていただいています。

キリスト教との関わりで、私は実は今、寿岳先生と「対話」をしています。中世最大の詩人ダンテの『神曲』の翻訳をされていますが、実はその前に文部省が 25 年ほどかけて『キリスト教用語

辞典』というのを編纂しているのですが、関学、同志社、神戸女学院のキリスト教関係の専門家が集まって編纂に関わっています。そこに唯一キリスト者でない人で、大きな貢献をされたのが寿岳先生です。それがあったから、ダンテの『神曲』を深く読みこみ訳すことが出来たということも書いておられます。もともとは真言宗高野派の出ゆえでしょうか、根底には仏教的なものが流れていると思います。関学に来られて、キリスト教との関わりの中で、やはり対話的な、そういう意味で柳さんの宗教哲学の『宗教とその眞理』、これが寿岳先生にとって一番影響を受けた書と言えます。キリスト教と仏教との非常に深い内面的な対話を試みた柳さんの宗教論に出会ったことが、非常に大きかったのではと思います。

ここで寿岳先生の宗教論について話すつもりはないのですが、私の問題意識との関係で、24、5年前に関学の百年史を編纂するという大きなプロジェクトに入れていただいた時、関学で百年間に関わってきた人達の一次資料がたくさん出てきまして、そんな中に寿岳先生はいかに凄いかということ、ほんとに今でも思っています。寿岳先生評価を関学の中でしっかりしないといけないという、これが私の使命です。

寿岳先生との関係で柳さんも三年ほど関学へ教えに来ておられましたが、柳・寿岳・外村この3人との関係で、実は、2010年11月に大学の図書館の時計台で、展示と講演会を企画しました。今回お話がありました時に、ここは是非とも市をあげて、あるいは市民の関心のある者がやはり保存しなければいけない、そのためには業績を学ばせていただいて、文化財として守っていかないと心からそう思いました。

寿岳先生は英文学者としてもいろいろなことで優れておられるのですが、特に惹かれるのは、人間として、根底に平和への思い、一人の人間の尊厳というものに対しても、非常に偏見にとらわれない目でみつめてきちっと評価していく、本物は何といっても凄いという姿勢、そういうものが社会を、歴史を変えていく、そういうことを教えられて来ているのです。だから単にきれいだとか、ちょっと趣味的にとか、そういうものもありますが、やはり入れば入るほど、根底にそういうものがあり、今のグローバルな何が何だかわからなくなっているというような時代の中でも大きな意味をもっていると思います。

この『工藝』ですね。すばらしい、大変美しいですが、なかなか手に入りにくいところを、大学図書館で全巻120冊を入手でき、これを記念して6年前ですが、先ほどの三人の方について記念の講演会をさせていただきました。そうしたら兵庫民藝協会が全面的にバックアップしてくださり、大阪・京都からも来ていただいて、いろいろなことを教えていただきました。あらためて感謝をいたしたいと思います。まあ寿岳先生が導いて下さったという思いを感じています。とくに後でふれますが、日本民藝協会が分裂していきますね、日本民芸協団として。そういう不幸な歴史があつて、それ以降一緒に同席していないのですが、この時にたまたま同席して下さったのです。これはほんとに寿岳先生が導いて下さったものと感動的でした。

さて、ここで基本文献表(註1)を見ていただきます。13番がこの間の講演をさせていただいた時のものです。図書館資料があるかと思しますので、希望の方は大学図書館あるいはインターネットでダウンロードできます。12番は、その9年前に時計台の歴史編纂室の責任者をしておりました際に、「知られざる学院史の一齣—民芸運動との関わりをめぐって」という論文を、民芸運動と関学がいかに深い関わりがあるかということを書きましたら、図書館の山崎さんが評価して下さり、こ

ういう大学図書館のプロジェクトに入れてくださったのです。今日お話することは、この2つの論文をベースにしていることをご理解いただきたいと思います。

4つの柱でお話いたしたいと思います。

- [1] 関西学院と寿岳文章
- [2] 民芸運動における指導的役割
- [3] 書物の工藝
- [4] 和紙の研究

この4つの柱で、『工藝』の一次資料からコピーさせていただいて、テキストをつくり、そこからいくつかピックアップしたものを用意させていただきました。

[1] 関西学院と寿岳文章

寿岳先生は、1900年に明石の真言宗のお寺の住職の息子さんとして誕生され、いろいろな経緯があって、1919年に、関学高等部英文学科に入学されます。この時決定的出会いを経験するのですが、その時の英文科の学生二人が寿岳先生と岩橋武夫さんです。岩橋さんはご存じのように、視覚障害になられて、当時関学は全国で唯一、視覚障害者に門戸を開いていて、関学に来られました。後にエジンバラに留学、ミルトンの研究で英文学教授にまでなられました。その学生だった時にサポート役の妹（静子）さんがおられて、その方が寿岳先生のパートナーになられました。ほんとにすごい出会いがあったのです。

人権感覚ということではほんとに身近に、そういう出会いのなかで、寿岳先生ご夫妻は非常にシャープなものをお持ちになっていた。ご存じのように、岩橋先生はヘレン・ケラーと大変親しく、日本に度々呼びになり、大阪に視覚障害者の生活のサポートの拠点をつくられたのです。

英文学の業績としては、出発点の一つはブレイク研究でした。1952年には京都大学より文学博士の学位をうけます。そして、受賞されたダンテの『神曲』ですが、実は岩波文庫で山川丙三郎訳が出ていまして、寿岳先生は文語訳としてはこれ以上の訳はないと、大変評価されていますが、現代の人に読んでもらうために新しい口語訳をされたのです。ほんとに素晴らしい翻訳です。

寿岳先生は、1932年に関学専門部文学部の講師に招かれます。2年後に大学に認可されて、法文学部文学科英文学講師として専任となり、のち文学科教授となっていけます。ここで興味深いのは、戦時下どうしておられたかということです。基本文献にあげました5番の『寿岳文章書物論集成』という大きな本があります。ありとあらゆる業績がそこに詰まっています。その中に「私の戦中戦後」という文章を書いておられます。その中から紹介します。

戦時下となると、配属将校が学内に常駐し、軍事訓練などがある中、時間割とか大変な苦勞をされるわけですが、時間配分をめぐって、許されるところまで学生本位に闘っていかれるので、学内でも睨まれているのです。勤労働員や護国神社の清掃をやっているのですが、そういう時にぶらっと学生たちを奈良の法隆寺に連れて行きます。法隆寺がいかに美しいか、いかに素晴らしいものであるか、学生にそこで講義するのです。だからぎりぎりのところで、日本文化について戦時下の学生たちに何を伝えたいか、ということで闘っておられた熱意が伝わってくるのです。

もう一つ、戦後の話ですが、関西学院が60周年を迎えたときの1949年ですが、新しい校歌が必

要ということで、英語で“A Song for Kwanseï ”という関学の歌があります。古い歴史をもつ関学のグリークラブが演奏会を開いたときは必ず、“A Song for Kwanseï ”を歌うのです。美しい素晴らしい英語の歌詞で、関学出身の山田耕筰さん作曲で、エドモンド・ブランデンという人が作詞したものです。このブランデンは当時イギリスを代表する詩人でありましたが、そのブランデンが東京大学で特別レクチャーのために招かれて来たのです。たいへんな評判になって、みんな何とか自分の大学の校歌を作ってもらいたいと考えていたのですが、なかなか叶わなかったのです。ところが2校だけ叶えられて、東は東京女子大学でした。なぜならあそこは斉藤勇先生という高名な英文学者がおられたのです。西はこの関学に作っていただいたのです。それは次のような、ひとえに寿岳先生のおかげであったのです。

寿岳先生が英文学者として偉かったということもありますが、むしろ、1940年、1941年ころの戦争に突入していく時代に、英米の外国人や宣教師たちも皆母国へ帰国し始めます。その前からだんだん英米人に対する風当たりが厳しくなり、親しかった人達もみな離れていきます。ところが寿岳先生だけは、外交官だったジョン・ピルチャー氏に対して、最後まで友人として心を許していました。ピルチャー氏は寿岳先生ご一家の心に深く感じいったのです。英国へ帰るのですが、戦後、英国を代表する外交の要として（後に英国駐日大使）再び来日します。東京からすぐ、まっすぐに向日町に来られたのです。寿岳邸を訪ねた時、寿岳夫妻が紙漉で和紙をつくり、苛酷な戦争中もずっと書物を作っておられたという、その姿をピルチャー氏が見て、涙を流して抱き合ったというのです。「あなたの所へもうすぐブランデンという英国を代表する詩人を送ります。信頼できる人です。よろしく頼む。」と紹介されます。

関学の校歌は、ブランデンが、寿岳先生を通してわざわざ西宮まで来て、1週間滞在して、風を感じたり、いろんな空気を感じ、校風を感じたりして、そうやって作り上げた、“A Song for Kwanseï ”です。僕らにとっては大切な名曲なのです。一度何かの機会に聞いていただければと思います。ほとんどの関学の人、なぜその歌が出来たのか知らないのです。寿岳先生がいて、平和への祈りというものが深く込められた歌なのです。学校の関係で、寿岳先生のそういう一面をご紹介します。

[2] 民芸運動における指導的役割

日本の民芸運動における、特に京都の民藝協会のなかでの寿岳先生の指導的役割は申すまでもありません。中には民芸運動について初めてという方もいらっしゃるかも知れませんので、お手許の資料を見て下さい。「日本民藝美術館設立趣意書」というものです。柳宗悦、富本憲吉、河井寛次郎、濱田庄司の4名で趣旨を書いています。最後のくだり—

「民藝の美には自然の美が生き國民の生命が映る。而も工藝の美は親しさの美であり潤ひの美である。凡てが作爲に傷つき病弱に流れ情愛が溷死して來た今日、吾々は再び是等の正しい美を味ふ事に、感激を覺えないであらうか。美が自然から發する時、美が民衆に交わる時、そうしてそれが日常の友となる時、それを正しい時代であると誰か云ひ得ないであらう。私たちは過去に於てそれがあつた事を示し、未來に於てもあり得べき事を示す爲に、此「日本民藝美術館」の仕事を出發させる。」

（『柳宗悦全集著作篇第十六卷』「日本民藝美術館設立趣意書」より）

1981(大正15)年の設立です。英語で フォーク・アート、民衆的工芸、柳さん達の造語ですね。貴族的工芸ということの対比でこれをオフィシャルな形で提示したわけです。

その後しばらくして『工藝』という雑誌を創刊します。和紙で作ってあり全国各地の民芸を紹介し、800部くらいの手刷りです。刊行の趣意が参考資料「雑誌『工藝』刊行趣意」（『柳宗悦全集 著作篇第二十巻』）にあります。民芸運動の機関誌と同時にこれ自体が作品となるような、日本に残っている中でもっとも美しい雑誌といっても過言ではないかと思えます。一冊一冊が作品で、そこにもものすごいエネルギーを使っているわけです。もう一つ柳さんの文章を紹介します。次のページの「民藝とは何か」をご覧ください。

「工藝品とは實用品である。さし當り此の簡単な定義で充分である。私達は此の内容から色々なものを導き出す事が出来る。工藝の概念には「用」と云ふ事が要である。用を離れて工藝はない。それなら物は用を去るにつれて工藝の意味を失ってくる。用への無視はやがて工藝への無視である。それ故こうも云へよう、用に近づけば近づく程工藝の意義を完ふしてくると。用に即する事が工藝の生命である。」（『工藝』第1号 柳宗悦「民藝とは何か」抜粋）

非常に簡潔に用の美とよばれる民芸の中核をなすコンセプトについて『工藝』の第1号で書いているのです。

寿岳さんは柳さんと最初どこで出会っているのか、その辺のところを申し上げます。1922年、震災の前の年、関学の学生だった時に卒業論文でブレイクを取り上げていますが、東京の柳さんがその研究をしているということで、東京の柳さんを訪問したのが最初の出会いといわれています。『宗教とその真理』というのが、寿岳さんが最も感銘を受けた書物です。宗教哲学の三部作のひとつでたいへん優れた書ですが、読み解くのが難しい書です。

そして1924年に、関東大震災で京都に引っ越してきた柳さんとの本格的な交流が始まります。そして共同の雑誌『ブレイクとホキットマン』（1931年）を出します。あまり長く続かなかったのですが、寿岳さんの最初の本作りの原点になるような雑誌を柳さんと一緒に作っています。柳さんは『工藝』が出たその年に、二つの雑誌を創刊したことになります。しかも和紙を使って、これ自体『工藝』とクオリティーが似て、質の高い、工芸品として価値がある、書物工芸の原点といえるべきものを柳さんと共同で出したのです。

もう一つ、先ほど少し触れましたが、やはり寿岳さんが柳さんによって最も心を動かされているのは、平和の思想ですね。非戦思想です。戦争の足音が近づいてくるような時代に、朝鮮との関わり、あるいは沖縄との関わりを含めて平和思想が一貫しています。普通ならいわゆる骨董的な物、刀の鏝みみたいな物が入るのですが、そういう物は絶対に集めない、そこが凄いと書いているのです。そこがなければこんなに大きな影響を与えてこなかった。現代でも最も大切なことだと思っています。

民芸運動の役割の中では、寿岳さんは『工藝』の同人として編集にも関わっていきます。それから式場隆三郎さんなどの『月刊民藝』の同人にもなり、その中で和紙の特集号がいくつかあります。『工藝』28号(1933年4月)、59号(1935年11月)、『月刊民藝』では31号(1941年11月)、こう

いうあたりは寿岳さんが特に力を入れておられた特集です。

民芸運動で忘れることが出来ないのは「和解のはたらき」です。戦後の民芸運動のなかで、一貫して指導的役割を果たしてこられた大阪の三宅忠一さんですね、いろんな面でカリスマ的な方で、大きな貢献をされた方ですが、この方が大阪に「日本工芸館」を作られました。寿岳さんは分裂した時のことも書いておられますが、とても痛みになって、自分も辞任するとまでいわれていたのですが、組織内に踏みとどまって欲しいと言われたのです。三宅さんは、本来無名の職人の技である民芸から、いろんな著名な方が活躍していくのは矛盾しているのではないかと、今でも無名の個人作家といわゆる有名人のような、民芸の本来もっていたその関係がいったいどうなるのか、ということで三宅さんは柳さんと論争して別れていったのです。

寿岳先生は厳格で厳しい人ですから、私はかなり三宅さんに近いような立場を感じておられたのではないかと思います。その意味で別れた方の理事長を引き受けられた。ただ、別の側面からいうと、柳さんと寿岳さんは二人三脚的な間柄であるわけです。生涯そうですね。『柳宗悦と共に』という本があるくらいですから、やはりどこかで、時間が経てば和解して欲しいと、柳さんだったら理解されると、そういう和解を祈ってしんどい立場を引き受けられたのではないかと、これは私の、いろんな資料を読ませていただいた上での感想です。

こうして1959年に「日本民芸協団」ができるわけです。先ほど申しました関学で2010年の催しをやらせていただいた時に、民芸協団の方が何人かいらして下さって、分裂してから初めてそこに同席して下さった。寿岳先生が導いて下さったという思いを深くした次第です。

[3] 書物の工藝

資料の「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」（寿岳文章訳）をご覧ください。これは『工藝』の44号(1934年)のところにしている、ウィリアム・モリスの有名な「ケルムスコット・プレス」です。すなわちモリスの理想の書物を生みだしていくプレスです。今またモリスブームですね。美術館が若い人でいっぱいなんです。静かにそういう民芸が若い世代に響いているものがあると思います。新しい民芸運動の世代交代の課題を考える時に、そういう若い世代が生まれて来ていることをどう繋げるか、一つの課題になっていると思います。そういう意味で、私個人は何も出来ませんが、大学みたいところがジョイントしていくと、もう少し民芸運動の広がりが出てくる。関西学院や甲南大学など寿岳先生つながりで、もう少し連携していけばいいのではないかと思います。

このモリスやラスキンについては、柳さんは『工藝の道』でこの二人を論じているのですが、二人ともオックスフォード大学で学び、研究所があります。二人ともキリスト教に深い関わりをもっています。モリスはオックスフォードの神学生であって、しかもキリスト教社会主義という賀川豊彦さんらに大きな影響を与えたそういうムーブメントを、モリスはある意味ではもっとラディカルなところがあります。ラスキン、モリスはベースは、宗教的なキリスト教的な社会主義、社会思想—社会を急激にではなく、ゆるやかに変えていく、そういう思想に、友愛とかですね、柳さんは民芸運動の基礎的なものとして、協団という考え方にインスパイアされているのではないかと思います。オックスフォードで研究が盛んで、日本でも紹介されたりしてきているわけです。

基本文献の方にある「書物工藝家としてのモリス」、これは『モリス記念論集』という戦前に編まれた本ですが、ここに本格的な寿岳さんのモリス論が出ています。ケルムスコット・プレスは「ケ

「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」で、モリスが最初に述べています。

「私が書物の印刷にこころざしたのは、美しさへのはっきりした要求を持つと同時に、読みやすくて眼をちらつかせず、また殊更に風變りな字形によって讀者の頭腦を亂すことのない書物を作る爲である。」「十五世紀の書物と言へば、よく其れらの多くを惜し氣なく飾ってゐる・・・」(『ウィリアム・モリス』寿岳文章訳「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」抜粋)

15世紀に印刷機が出来てから、百年くらいは美しい書物が出来た。モリスはそれを19世紀の時代にリバイバルしようとした。そして寿岳さんもそれを模範にして、日本の材質を使って、美しい書物を目指された。これは翻訳ですが、非常に大切に、ご自宅で向日庵を開かれたモデルは、モリスのこの「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」だったのです。

去年(2015年)、関学で博物館(時計台の二階)が開設されたとき、最初の展示を企画させていただきました。その中に関学が持っている聖書の展示、これ現物の写真ですが、グーテンベルクの『四十二行聖書』(たまたま私が学部長の時に京都の古書店で見つけ買っていただきました。)これを今持っているのは、慶応大学、天理大学などで、持っているとい国際的なネットワークで紹介されます。そうしたら関学の図書館が世界のネットワークに載ったので、嬉しくなりましたね。他に『死海文書』とか、特別の展示の時ですが、いろいろな機会に展示したいと思っています。『四十二行聖書』、これはほんとに美しいですよ。こういういいものを集め始めています。ミッション・スクールは意外に所蔵していないのですが、天理大学などは凄いですね。

やはり寿岳先生はこういうものを色々な形で見てこられて、変に飾らない、しかし手に取るだけで美しい、こういうものを目指して向日庵を作られた。やはりモデルがあるのです。ああいう本を作りたいと。これは、印刷技術が生まれた時の代表的な書物です。これから百年間、一番最初の頃のものには本当に美しいです。

柳さんもやはり白樺派時代は、キリスト教の色々なことを紹介しているのですが、書物というものがどういうものか、寿岳さんと深いところで共鳴していたと思います。柳さんの中世のキリスト教主義への造詣の深さはものすごいものです。そして、それと呼応するかのように、寿岳さんもダンテの『神曲』に至る、中世の最高のキリスト教文学でしょう、だから単に仏教的に優れた見識を持っておられただけでなく、キリスト教に対する造形の深さは、神学者も驚くほどでした。そこがすごいです。

「装幀論」ですが、資料をご覧ください。客と主人との対話方式になっています。

「装幀を支配する原理は何か。」「用と美だ。今も言った通、書物は手に取りあげられ、眼で讀まれる。取りあげる手と見る眼とはすでに用と美との世界の住人である。書物の工藝性はここから出發する。」「書物では用と美とどちらが大切か。」「用が大切だ。美は他の工藝の場合に於ける如く、寧ろ用に内在し、用から顯現すると言ってもよいだろう。」(『工藝』44号) 寿岳文章「装幀論」抜粋)

美が大切だというのではなく、用に内在しその中から顯現する。対話形式でわかりやすく書かれ

ています。用の美が書物工芸における基本的なコンセプトになっています。

それから向日庵本のことですが、1932(昭和 7)年、32 歳の時ですが、『向日庵発願記』を書いています。この時から、ご自宅で奥様と二人三脚で、すべてをささげて、向日庵本に取り組みます。資料にあります(註2)、これは最初にご紹介した『寿岳文章書物論集成』からコピーしたのですが、向日庵で生まれた書物を挙げています。最初はウィリアム・ブレイクのもですね。それから『向日庵消息』第一信から第十信まで、これはとても面白いものです。寿岳先生が日々どういうことを考えていられたのかがわかります。

それから式場隆三郎さんの訳した本『テオ・ファン・ホッホの手紙』、もともとの本は向日庵で作った本です。深い交流があった方です。

『書物』も評価が高いです。『絵本どんきほうて』は向日庵の一つの傑作です。そしてもう一つの代表作『紙漉村旅日記』、これは昭和 18 年 9 月に出されて、戦争に突入したただ中で完成しています。

その他に編纂本として『ブレイクとホキットマン』とか『和紙研究』。和紙研究は非常に重要で、寿岳先生は世界的なオーソリティーと言えます。

[4] 和紙の研究

最後に和紙論ですが、資料の「和紙復興」をご覧ください。

「舊来の和紙は、今私達をかこむ西洋紙の洪水に押し流されようとしてゐるが、品質の上から言へば、西洋紙と比較にもならぬほど立派なものである。すぐれた製紙材料にめぐまれてゐるわが國の風土は、おのづと優秀な紙を作り出した。日本の用紙製造業者は外國でも上質の印刷用紙には常に日本の手漉紙が用ゐられてゐると云ふ事實を知らないのか。國家外交の文書などでも、恒久の保存には日本の鳥の子が最も適當とされてゐる事實を知らないのか。」(『工藝』28号、寿岳文章「和紙復興」抜粋)

洋紙だと大体百年くらい、和紙だと千年くらい持つと言われていました。今は西洋でも和紙の評価が非常に高いですが、そういうベースを寿岳さんは作って来られた。

「漉場紀行」という資料があります(基本文献9)。帝国学士院の推薦で、有栖川宮奨学金を受けて、1937(昭和 12)年より 3 年間、日本の手漉紙業の各地を歴訪する旅を行います。これは 1945 年の本で、神田の神保町で見つけました。芹澤銈介さんの表紙で、寿岳さんの名前がでている『紙漉村旅日記』です。とっても美しいですね、全部和紙でできています。訪れた各県一つ一つの紙漉場が出ていて写真がとってあります。数ページにわたって各地域の和紙の見本が入っています。1943(昭和 18)年に向日庵で出したものを、もう少し補充して 1945 年に出した初版です。ちょっと貴重なものです。

民俗学で有名な宮本常一先生が、これはフィールドワークのモデルだ、フィールドスタディの模範だとも、それくらい高い評価を与えられています。戦時中で、たぶん紙漉場どころではない筈です。でもこのままでは、そういうものが滅びていくのではという危機感があったと思います。そういう中で、不便なところへ、ほんとに大変な旅であったと想像できます。和紙を守ることが、「平和

の証し」なのだと、そういうミッションが先生を動かしていたのだと思います。
これで終わります。ご清聴をありがとうございました。

註1 <基本文献>

1. 柳宗悦との共著『ブレイクとホキットマン』（同文館 1931年）
2. 『紙漉村旅日記』（明治書房 1945年）
3. 寿岳文章『柳宗悦と共に』（集英社 1980年）
4. 『寿岳文章書物論集成』（沖積舎 1989年）
5. ウィリアム・モリス（寿岳文章訳）「ケルムスコット・プレス設立の目的に付て」（『工藝』第44号）
6. 「書物工藝家としてのモリス」（『モリス記念論集』川瀬日進堂書店 1996年 復刻）
7. 「装幀論」（『工藝』第44号 1934年8月）
8. 「和紙復興」（『工藝』第28号 1933年4月）
9. 「漉場紀行（一）」（『工藝』第87号 1938年4月）
10. 「民芸運動と和紙」（『民藝』254号 1974年2月）
11. 神田健次「初期柳宗悦における宗教論と民芸論」（『基督教論集』第44号 2001年3月）
12. 神田健次「知られざる学院史の一齣一民芸運動との関わりをめぐって」（『関西学院史紀要』第七号 2001年3月）
13. 神田健次「民芸運動と関西学院—雑誌『工藝』を中心に」（『時計台』（大学図書館 2010年4月）

註2

向日庵本

- 唯理神之書 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和7年4月
無染の歌 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和8年2月
セルの書 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和8年10月
* 向日庵消息（第一信～第十信） 昭和8年6月～昭和18年8月
Exoteric Writings of William Blake [編] 昭和8年12月
テオ・ファン・ホッホの手紙 式場隆三郎訳 昭和9年8月
Letter from Shimane and Kyushu by Lafcadio Hearn 昭和9年10月
無明の歌 キリヤム・ブレイク著[複製・訳] 昭和10年3月
詩集 願はくは 野田理一著 昭和10年7月
書物 昭和11年3月
絵本どんきほうて 芹澤銈介 昭和11年10月
永遠の福音 キリヤム・ブレイク著 [訳] 昭和13年5月
和紙景観 昭和14年7月

The Art of Paper Making in Japan by Richard Tracy Steven

[複製] 昭和 18 年 2 月

紙漉村旅日記 寿岳文章・静子共著 昭和 18 年 9 月

A Bibliography of Ralph Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935 by Bunsho Jugaku

昭和 22 年 12 月

* *Eastward: A Selection of Verses Original and Translated* by Edmund Blunden ブランデン
詩集刊行会発行 昭和 24 年 12 月

In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D. 昭和 27 年 5 月

* *The Year of Monkey* by D. J. Enright 甲南大学理事会発行 昭和 31 年 4 月

編纂本

* ブレイクとホキットマン 柳宗悦と共編 第一巻 I—XII 昭和 6 年 1 月—12 月
第二巻 I—XII 昭和 7 年 1 月—12 月

* みおつくし ぐろりあ そさえて発行 創刊号・昭和 4 年 二号・昭和 5 年

* 和紙研究 和紙研究会発行 昭和 14 年 1 月—54 年 12 月

* 和紙談叢 1 和紙研究会発行 昭和 12 年 2 月 1 号のみで終わった

* 印は向日庵本ではないが、先生が編集に携われた準向日庵本である。

註 3 『工藝』 87 号、寿岳文章「漉場紀行」

「寿岳章子先生の学問と著作、その他」

京都府立大学教授 赤瀬 信吾

皆さんこんにちは、赤瀬でございます。寿岳先生のレジュメなどを作成して懐かしゅうございました。今日は寿岳先生のお人柄などを偲びながら先生のご業績についてお話しをさせていただきたいと思っております。

はじめに挙げました資料は、これは寿岳先生が亡くなられたときに鶴見俊輔先生がお書きになられたものです。『悼詞』(SURE)というご本がございましてその中からのものです。鶴見先生もとうとう昨年95歳で亡くなられてしまいましたけれども、このなかに、寿岳章子先生、寿岳文章先生、お二人の思い出が書き綴ってあります。これはなかなか面白い文章でございまして、特に生前からの先生方のおつきあいのことなどがよく出てまいります。資料には、章子先生のほうを先に挙げましたが、これは文章先生が亡くなられたときに書かれたものですので、実際には文章先生のほうが先に載っております。

このなかで非常によく触れられておりますのは、むしろ寿岳しづ先生が翻訳された、W. H. ハドソンの『はるかな国 とおい昔』という本のことです。これは、ハドソンの子ども時代、半生記を描いたもので、岩波文庫のけっこう分厚い本です。南米のラプラタ川という川の流域で育ったその思い出を綴っているもので、名訳として大変有名な本であります。鶴見先生は、このハドソンの『はるかな国 とおい昔』を読んで、戦中の重苦しい時代というものをこの本が忘れさせてくれた、一時の大変楽しい思い出をくれた、ということを書いていらっしゃる。そのハドソンをしづ先生が翻訳なさったときのことを、文章先生も章子先生もよく語っていらっしやいました。鶴見先生の本には、お父様の文章先生も関西学院大学で授業のときに『はるかな国 とおい昔』の原文を読んでいたというふうなことが出てまいります。いろいろな人の名前が出てきますけれども、例えば、児童文学者の庄野英二さんも関西学院で文章先生の講義を受けていたようです。庄野英二さんは、のちに帝塚山学院大学の学長さんになられる方です。終戦のころは、私の中学の先生もそうでしたが、学生が終わったらすぐに陸軍のほうにとられてしまって満州に送り込まれることがよくあったようです。満州に送り込まれて本人はわけがわからずBC級の戦犯にさせられてしまうということもあったようです。庄野先生の場合は、戦後になって帰国してからまた児童文学の世界に戻られました。『星の牧場』など非常に有名なお本がございまして。そして最後は大学の学長までなさいました。このように、この本には『はるかな国 とおい昔』のことを中心に、永く交わってこられたいろいろな方々が出てまいります。「寿岳家」という文章先生、しづ先生、章子先生がお暮らしになられた雰囲気というものが、戦中にありながら、非常に自由なものであった、明るいものであった、健康なものであった、ということが、鶴見先生の文章からもよくわかります。章子先生と鶴見先生はわりとよくお会いになっていたようで、鶴見先生は生まれは東京ですが、京都で亡くな

られました。私は子供のころに、『はるかな国 とおい昔』を読んでおりましたものですから、まさかその翻訳者の娘さんである章子先生に大学でお仕えすることになろうとは思いませんでした。私はまだ32歳で、章子先生がそのときにもう60歳くらいになってらっしゃったんだろうと思います。二年間か三年間ほどお仕えさせていただいたのですけれども、明るい雰囲気の世界でした。先生のお部屋には秘書の方が二人もいらっしゃいました。講演会などのときには、章子先生は相手の条件などは一切きかずに二つ返事でお受けになっていらっしゃいました。講演の内容も国語学というかたいものではなくて、例えば鹿児島の特攻隊基地といったところで戦時中の話などをなさっています。参考文献として挙げました『過ぎたれど去らぬ日々』（大月書店）は、章子先生の自伝です。この自伝のなかにもあったと思いますが、「あなたの一番好きな本はなんですか。」と学校の先生から聞かれて、「ハドソンの『はるかな国 とおい昔』です。」と答えたら、やはり時局柄あまり合わなかったのでしょうか、学校の先生は「えっ」という顔をなさった、ということがございました。章子先生がお若いときは、まだ女性が大学に行くとすれば東北大学しかなかった時代ですね。章子先生は東北大学へいらっしゃって、それから京都大学の大学院にいらっしゃって、そして京都府立大学へというような時代を経ていらっしゃるのですが、戦時下のことなんかも描いていらっしゃいます。実はこれ、NHKで放映されたのをご存じでしょうか〔註：NHKドラマ人間模様 つか来た道 1983年放送〕。三田寛子さんが主演なさったんですが、「三田寛子もまあまあよね」と先生おっしゃいまして、何ということ、と私は思いました。ところが、あとで章子先生の京都大学大学院のころの研究会の皆さんのお写真拝を見したんです。可愛いですね。なるほど、そういうだけのことはあるなど、可愛らしゅうございました。このように、ハドソンのお話なんかずいぶんなさっていました。寿岳家では、章子先生が子どものころから、例えば文章先生がご本をつくるということがお好きでした。あるいはまた、これはご本をつくるためにも関わってくるんでしょうけれども、紙というものの美しさ、楽しさ、というようなものをよくご存じの方で、よくそのお話などもうかがいました。この鶴見先生のご本にもありますように、やはり鶴見先生ご自身がこのハドソンの『はるかな国 とおい昔』によって勇気づけられたということが多くあったのだらうと思います。文章先生は、ウィリアム・ブレイクというイギリスの詩人の研究者、訳者です。鶴見俊輔先生がその文章先生とは三回くらいしか会ったことはないということですが、その訳業を通じていろんなことを学んだりしたということと、そしてやはり『はるかな国 とおい昔』というものによって与えられた、人間的な落ち着きといいますか、そうしたものについて述べていらっしゃいます。例えばマルキシズムの哲学者である古在由重という先生がいらっしゃいます。この古在由重先生はマルクス主義者でしたから、可愛そうなことに巣鴨〔註：巣鴨プリズンのこと。戦犯収容施設で巣鴨拘置所とも呼ばれた〕に三年ぐらつぶちこまれていた人です。たった三畳敷でも独房だから本が読める。不思議なもので、思想犯だからでしょうけれども拘置所から出されてそして刑務所へ行く途中で本を買うことができたんですね、戦時中のことですから。古在先生はその時にマルキシズムとは直接関係ないからということだと思のですが、ハドソンの『はるかな国 とおい昔』をそのとき買い求めて巣鴨へ持って行ってそこでお読みになった、ということまで書いてあります。先ほどの庄野英二さんもそのような世界のなかで育てこられた方だから、いい文章をお書きになったんだと思います。庄野英二さんには弟さんに、庄野潤三という『プールサイド小景』という小説を書いて芥川賞をもらった方がいらっしゃいます。一方、古在由重さんは古在由直（足尾鉍毒事

件の調査で有名)の息子さんです。マルキシズムの哲学者で戦前からずっと有名で戦後も長生きされて名古屋大学の哲学の教授になられた方です。ただ、戦後の共産党がうろうろと様々な権力闘争があった時代に、除籍処分を受けるなど不運な面があったということですね。古在先生は、寿岳しづ先生に宛てて、あなたのご本を読ませていただいて大変楽しかった、ということを書いていらっしゃいます。古在先生のような方々にいろんな力づけを与えたということ、それは単に寿岳しづ先生の訳がよかったからだけではなく、やはり寿岳家というものの持っていた雰囲気がいへんよかったからではないか、健康なものであったからではないか、思います。

実は、私ごとになりますけれども寿岳文章先生という名前を存じましたのは中学のときでした。資料に挙げましたが、私が中学のころに覚えた詩に、「寿岳文章訳」と出ておりますダンテの四行詩があります。ちょうど『世界の訳詩集』というのがございまして、それを読んでおりました。資料には心覚えのまま書きましたが、<花づなの かげに見しより おもはるれ 花見るごとに> そのような詩です。文章先生はたいへんすばらしい訳詩をなさる方で、ダンテの『神曲』あの三巻本の大冊をお出しになりました。あとで考えて見ればなぜ私は寿岳先生のサインをもらっておかなかったかと後悔いたしました。文章先生の時代の翻訳の方というのは、ある種の高雅な訳をお使いになるものですから、そのままではなかなか意味がとりにくいんですね。このダンテの四行詩でも非常にわかりにくい単語ですけれども、「花がつなのようにつらなっている、そのかげにあの人をはじめて見た、その人のことは花を見るごとにその人のことを思われてならない」、とそのような意味なのですが、五七調はお使いになるし、「花づな」という言葉などは普通は理解できないのではないかと思います。ダンテの『神曲』の訳も難しすぎるんですね。非常にいい高い調子で訳をなさっているのですが、古語がたくさん使われておまして、文章先生の訳されたものをもう一度翻訳しないと理解できないというところもあったりして、面白いなと思いました。まさか中学のときに翻訳の詩を拝読した、そのような先生に会えるとは思わなかったですね。文章先生がもう九十歳になられるころにお会いして、いろいろなお話をおうかがいしました。「ミキがね」とおっしゃるんですね。「ミキって誰？」とよく考えてみたら、三木清という優れた哲学者のことです。岩波文庫の設立に非常に努力をされた京都大学出身の哲学の先生で、戦時中に獄中にほうりこまれてそれで結局そのままお亡くなりになります。その方のことを「三木がね」って言える人は、世の中にそういないでしょう。それほど、柳宗悦氏なんかでもそうですけれども、交友範囲が非常に広がった先生だということがわかります。皆さんは、寿岳家にいらっしゃったことがあるかもしれませんが、本当にたくさんものをお持ちでした。初めてお宅を訪ねましたときに、ガラガラガラと開けますと、こちら側のところに何気なく百万塔陀羅尼がぽっと置いてある、持って帰らんかといわんばかりに置いてあるのでびっくりしました。今日は、寿岳文章先生のこともいろいろお話したいんですけど、章子先生のお仕事についてすこしお話してみたいと思います。

寿岳章子先生のお書きになられたものを少し年代的に追ってみました。先生のご専門は基本的には「中世語」だというふうにご自身はおっしゃっています。章子先生はいろんな範囲でお勉強したり、遊んだりすることがお好きな方でしたから、大変広範囲なお仕事をなさっています。私は二、三年間、先生のお世話で助教授をやっておまして、京都府立大学を出られたあとも、抄物研究会

というものがありましたが、章子先生の持っていらっしやった抄物は非常に膨大な量でした。その中世語に関しては資料に挙げております。私が1985年に赴任いたしますその前から章子先生の中世語の研究は拝読しておりました。先生がご退官なさるときに、先生のお手持ちの抄物を『向日庵抄物集』（清文堂出版）というかたちで出ささせていただきました。この「向日庵抄物集」についてはまたあとでお話をいたしますが、章子先生のご関心はそれ以外に、「言語生活史」、「女性とことば」、「京ことば」、と広くお勉強をすすめておられました。ご活躍なさいますのが1960年代から1990年代です、資料に挙げましたように、かなりたくさんものを書いていらっしやいます。その一番はじめ、1960年のことですが、阪倉篤義という方がいらっしやいました。阪倉先生には私は京都大学で学びましたが、先生がNHKのテレビでも非常にわかりやすいお話をなさる方で、立派な学者でありました。私が大学に入学いたしましたのが1971年で、いわゆる70年紛争が終わったのですが、まだその余波がございました。授業の度にヘルメットのお兄さんが現れて、「今日はクラス討議をしよう」なんて言ってましたが、今考えてみると本当に子どもの議論でしたね。子どもの夢をみるような革命の話をしていて、そんな感じがします。いま考えると、そんなことで時間が無駄になったなと感じるんですけども、それでもまあ若いときですから、そういうことがあってもよかったのでしょう。

章子先生が1960年に出されているものに、『現代のことば』（三一書房）がございました。この本の共著者の一人である阪倉篤義先生は、章子先生のお師匠筋にあたりますが、早く亡くなられて大変もったいないことでした。お家は吉田山の近くにごございましたけれども、すぐ近くに先輩が下宿をしていましたものですからその前をよく通りました。もうお一人の共著者、この方は忘れてはいけない人ですが、樺島忠夫という先生がいらっしやいます。この先生は京都府立大学から国立国語研究所のほうに動かれた方で、いろいろなことを数量化して示す、というようなことをなさった方です。章子先生と樺島先生がいらっしやった頃というのはひとつの黄金期みたいなもので、この御三人で書いていらっしやるといいうところに非常に意味があると思います。章子先生はまだ非常にお若い頃のもので、そこから先生の関心は様々な方向にひろがっていきます。

次に、『レトリック』（共文社）という本を出していらっしやいます。この本あたりから、日本語の表現の問題、といったものを扱われるようになります。それから女性問題です。章子先生はずっと女性問題について深く関わってこられました。実際に行動としてもいろいろなことをなさって、例えば、いまの学生たちは知らないのですが、京都府立大学に「6号館」という建物がございました。この建物はもともと京都府立大学のものではなくて、もとは婦人会館でした。その京都の婦人会館の設立に一番努力をなさったのは、寿岳章子先生でした。五山の送り火が非常によく見えました。私は京都府立大学にまいります前には、愛知県立大学に五年ほど勤めていたのですが、その教え子たちが遊びにきましたときに、章子先生が「じゃあ五山の送り火を見せてあげるわよ」といって、その屋上を開放してくださったという大変楽しい思い出がございました。また、名前についても関心をお持ちで、『日本語と女』（岩波新書）、『日本人の名前』（大修館書店）という本があります。名前についてこれほど深い関心を寄せた学者はあまりいないのではないかと思うくらい、いろいろとお調べになりました。もしかしたら根底にあったのは、ご自身のお名前が「壽岳」という非常に数少ないお名前だからかもしれません。そしてもうひとつ、これは女性であるからこそなん

でしょうけれども、「暮らし」と「ことば」がどう結びついてくるかということにも大変関心を抱いておられました。もしかしたら、章子先生が中世語の研究をなさった背景にあったのは、室町時代の女性はわりと闊達なんです。狂言なんかをみておきますと、男を叱り飛ばすとか、そのような場面がたくさん出てまいりまして、これを「わわしい女」といっておりますが、このように、女性問題と関わらせるかたちで中世語というものを考えておられたのかもしれない。章子先生は狂言の方とも親しかったです。人間国宝になられた茂山千作さんと私は寿岳先生の研究室で会ったことがあります。壬生狂言にも大変興味をお持ちで、壬生寺で行われるものですが、この壬生狂言のなかに「炮烙割り」というのがございます。京都府立大学の近くの呑み屋に行きますと、もともとは「炮烙」を使っていた「炮烙焼き」というのがありますが、そこは大原の料理旅館の分館のようなところで、その炮烙焼きの存在を教えてくださいましたのも章子先生でした。

章子先生はやはり京都の人ですので、「暮らし」「女性」と同時に、「京ことば」というものについても非常に関心を持っていらっしゃいました。『はんなりほっこり』（新日本出版社）などは、やはり「京ことば」のいい本だなと思います。川端康成の『古都』という作品があります。ちょうど市電が通ったころです。京都府立植物園はもともと京都立大学の隣にあるんですけども、その府立植物園が戦後に一時期、進駐軍の上級将校たちの家になったということがあります。その後、進駐軍から返されまして再び京都府立植物園というものになるんです。この京都府立植物園になったときに、川端康成がそれをとらえて、『古都』を風景なども含めて書いてまいります。朝日新聞に連載されていまして、川端は大阪の人なんですけれども、東京暮らし、鎌倉暮らしが長いですね。ですから京ことばというのがどうしてもうまくいかないというので、四条にある料亭の女将さんに直してもらってようやく本にした、ということ川端自身が本に書いています。「実はその京ことばをなおしたのはこの方なのよ。」と章子先生が連れて行って下さったことがあります。

「京都人の密かな愉しみ」というNHK番組のなかで外国人の先生が言っていたことですが、日本にはふたつの人種しかない、ひとつは京都人、ひとつは京都人以外の日本人だ、ということです。あれを見ると、私は生まれが長崎なものですから、京都の雰囲気になかなか慣れなくて、一生京都人にはなれないな、と思います。

章子先生には、やはり京都に暮らしてきた方だなと思わせるところがありました。祇園祭のときには場所を借り切って仲間と一緒に観るということもありました。大変京都の暮らしがお好きで、とにかく何でもご本をお書きになりましたし、講演をたくさんなさいました。お書きになったエッセイを資料に挙げました。寿岳家のこと、特にしづ先生のこと書いているんですけども、わりとはやくに亡くなられたものですから、文章先生とお二人での暮らしのことを書いていらっしゃるものがございます。文章先生が亡くなられたあとに『想父記』（人文書院）という本をお書きになりまして、このなかには章子先生だけではなく、文章先生の晩年におつきあいのあった、たくさんの方々寄稿されています。どれを読んでも香り高く本当に面白いものです。これを読んで、ひとつは文章先生の人柄を知り得たということはよかった、本当に大きいんですね。学識の広さというのはまるで違います。ご自身はウィリアム・ブレイクを研究され英文学の先生として教鞭をとっておられましたが、イタリア語もお読みになりました。主に19世紀のおわりに活躍したウィリアム・モリスという人は、イギリスの社会主義者でありながら豪華な本を出していましたが、このウィリアム・モリスの展覧会が京都の美術館で行われたことがありました。それは大変充実したも

ので、文章先生はモリスの記念論文集を編んでいらっしゃる。そのモリスのケルムスコット・プレスという印刷も華美なものでしたが、文章先生はどちらかというと簡素なタイプの本をお出しになります。ご自身でおつくりになるのですが、それを家族の人達が手伝うというかたちの私家版をおつくりになっています。そのなかにはイギリスの詩人の詩集もありまして、見せていただいたことがあります。本当に綺麗なんですね。章子先生が「これ古本屋で手に入れたの」と見せてくださったものがあります。印刷のときに校正をしますが、まず一回ゲラを刷ってみて誤りのところを朱で直していく、それを重ねていきます。おそらくその校正刷りの職人さんが要らないだろうと思って貰われたのでしょね、それを寿岳先生の「向日庵本」と同じような装幀でつくってみせたものでした。これはご本人に見つかってははいけませんよね。文章先生からは、本はこうあるべきなんだ、まず本を開いたらどういう状態になるべきなのか、ということをお教わったことがございました。そのようなお父様と一緒に暮らしていらっしゃるから、章子先生には文章先生に関する本はたくさんあります。

もうひとつエッセイ集として秀抜だなと私が思いますのは、やはり京都の暮らしについてのものです。澤田重隆という画家が絵を挿れてお書きになっています。『京都町なかの暮らし』（草思社）、『京に暮らすよろこび』（同）、『京の思い道』（同）、『湖北の光』（同）、といったものがございます、これは、湖北地方のことについての一種の思い出ばなしと紀行文が混ざり合ったような本です。例えば、「鯖そうめん」というものがあって、そこのご主人におききになるんでしょうね、つくる過程をずっと書いていらっしゃいます。どこが魅力なのかというところまで行ってみたいですね、章子先生がそういうんだったら美味しいだろうと、つい「鯖そうめん」なるものを食べに出かけて行ってしまったことがございました。

私の研究室に章子先生が持ってらっしゃった抄物をずっと抱え込んでお持ちして、ダンボール箱に六十数点あります。物凄い抄物の蒐集で感心いたしました。先生がお辞めになる年だったと思いますが、ひとつ抄物展を開いてその重要なものを並べたことがございます。その展示目録を、緑色やら黄色やらの紙でコピーを使ってつくりました。するとそれまでコピーというものをまったく信用していらしゃらなかった寿岳文章先生が、「コピーでも綺麗にできるもんだね」とおっしゃってくださったことが私は大変うれしかったんです。その展示のときに、章子先生が「雁（がん）と雁（かり）」というご講演をなさいましたが、流石にうまいものでした。いわゆる渡り鳥のことです。渡り鳥の「雁」、これを漢字で書きますけれども、「がん」と読んだり「かり」と読んだり、どうして二つの読み方があるんだろうと章子先生は興味をお持ちになりました。名前というものに非常に興味がおありだったのだと思います。たとえば、「秋に来て花を見捨てて帰る雁（かり）」というように和歌では詠みます。春には帰ってしまう「帰雁（きがん）」ですね。和歌の世界ではそういう優美な世界を「かり」と読む。それに対して「がん」と読むときは、これは食べ物としての「がん」を指すということをお教わりました。これは大変面白かった。だからお豆腐でつくる「がんもどき」、あれは雁の肉を真似てお寺さんなんかでつくる、そのようなものだったんですね。念の入ったことですが、章子先生は、宮城県の伊豆沼だったと思いますけれども、雁はそこで越冬いたします繁殖するのですが、伊豆沼の雁の保護活動に手を貸していらっしゃるということもございました。

章子先生は抄物をたくさん集めていらっしやいました。抄物はそう安くはないんですね。「抄物」というのは中国の經典ですとか、禅の教えを書いた本ですね、それをここはこうなんですよと、何々ぞ、何々ぞ、と、そういうようなものです。戦後になると抄物はけっこうたくさん出てきまして、その当時の国語学者のなかで抄物を集めるというのは、寿岳章子、私の師匠である佐竹昭広、亀井孝、というこの三人が絶対王位でした。章子先生は学会での交友も広い方でして、しかもご親切なんです。亀井孝先生には『中華若木詩抄(ちゅうかじゃくぼくししょう)』という抄物のなかでもわりと有名な、中国の詩と日本の詩について註釈を加えたものですけども、おそらくその一番古い写本じゃないかと思いますが、それをお譲りになったということもございました。章子先生の抄物を私はしばらく研究室であずかっていたということを申しました。資料に挙げていますように、二つのコレクションがあります。ひとつは、「寿岳章子双六コレクション」(京都府立大学附属図書館)ですが、どうして双六に興味をお持ちになったのかといいますと、例えば、男性の場合には最後は陸軍大将になったり、いろいろしますよね、そうしたものがあつたのに対して、女性の場合には負けると下層の女の人たちのところへ落ちてしまう、非常に女性蔑視の在り方をこの双六からも読み取ることができるということで、双六を集めはじめられたようです。もうひとつは「寿岳章子抄物コレクション」(京都大学文学部寿岳文庫)という名前で納められています。もうひとつ双六に関して申しますと、『双六』(共著 徳間書店)という本をお書きになるほど双六には大変興味をお持ちだったということですね。章子先生の持っていらっしやる抄物いちばんこれは絶対いいだろうと思うようなものを集めて、先生のご退官の記念で本を出しました。それが、1987年に出した『向日庵抄物集』というものです。「向日庵(こうじつあん)」というのは、もともと寿岳文章先生がご自身でつけられた居宅の名です。先ほど申しましたように「向日庵本」を家族で造っておられました。その「向日庵」の印を貸していただいて、この本に向日庵の印を押させてもらった、そのような本もがございます。この『向日庵抄物集』の「はしがき」に、章子先生は自分の関心はとにかく中世語なんだということを書いておられます。確かにそのとおりだろうと私も思います。また、「抄物」の持っている意義について木田章義さんが書いてくださいました。この『向日庵抄物集』は、写真版でその当時いちばん最高の技術だったとそのとき非常に関心したのですが、清文堂さん(清文堂出版)が本を写真で複製しました。一番さいごに私が、章子先生の持っていらっしやった抄物の目録をつくって出しましたのですが、するとなかには珍しいものがあるんですね。その珍しいもののひとつが、『燈前夜話』というものです。

資料にも挙げておりますが、『燈前夜話』を寿岳先生は二本もお持ちでした。ひとつは版本で大変面白いものでした。だいたい皆さんこの版本で読むんですけどもね。ところがそれよりも写本で大変面白いものがあつた。それは何が面白いかというと、単に写しが古いというだけではなくて、竹中半兵衛の持ち物だ、ということがはっきりとわかるものなんです。秀吉の軍師ですよ。竹中半兵衛とその息子、竹中重治の二人の印が押してある。これは中国の歴史書なんですけれども、なるほどこういうものを使って勉強していたんだということがよくわかる、そのようなものでありました。非常に貴重なものだと私は思いましたが、写真版にしてしまうとあとは皆なかなか勉強してくれない、残念ながらいまはあまり使われていないようです。

そのずっとあとになりますと、フランク・ホーレー(Frank Hawley)というイギリス人の本のコレクターで、蔵書には「宝玲文庫」という印が押してあるんですが、こういった本はけっこうたく

さんあるんです。ある日、このフランク・ホーレーの旧蔵書の売立目録のようなものありまして、それを古本屋で手に入れました。そうしましたら大変面白いことに、もともとは「宝玲文庫」の印が押してあるんですから、フランク・ホーレーの持ち物であることはまず間違いないわけですが、その目録のなかにこの『燈前夜話』を見つけました。章子先生は抄物の蒐集家ですから、当然この目録を見てお買いになったのかもしれませんが。資料にその目録の表紙と裏表紙を載せておきました。（『ホーレー文庫蔵書展』東京古書會、昭和36年）そうしますと入札売立が昭和36年4月だということがわかります。そのときにおそらく寿岳先生のお手元に入ったということがわかるわけです。これはあくまでも憶測なんですけれども、このホーレー文庫、フランク・ホーレーという人の本来の研究対象は何かといいますと捕鯨です。捕鯨の歴史についていろんな文献を買って勉強した人です。ところがこのホーレー文庫の売立目録のなかでもうひとつ目立つものがありました。それは何かといいますと、紙文献です。紙についてのいろいろ古い文献がたくさん並んでいた。あ、そうかと。これに関わっているのが反町弘文堂という結構有名な本屋さんです。反町茂雄（そりまちしげお）という人がこのあと亡くなりましたけれども、たくさんの本を買って、そしてたくさんの重要な書物を送り出してくれた人でもありますし、海外に流出させた人でもあるんですけれども、なんでこんな本がストックホルム王立図書館に、と思ってよく見たら、反町さんの目録に出ていた、ということがありました。この目録の中に、先ほど申しましたように、紙文献がたくさんあるんですね。ということは何を意味しているかということ、紙について大変に詳しい、人間の立場からの接触のしかただと思うんですけれども、寿岳文章先生の『紙漉村旅日記』というのがございます。文章先生にはたくさん紙についてのご本があります。フランク・ホーレーが持っていた紙関係の文献がこの目録にたくさんあるということは、多分それを文章先生がお買いになったんだろうと思うんですね。そのときにふっと見たら抄物がある。昭和36年ですから、章子先生もお若いわけで、これなら章子にちょっと買ってあげようか、という感じで、もしかしたら文章先生が章子先生のためにお買いになったのではなかろうか、と。そのような親子の交流があったのではないかという感じもしています。それでこれをここでとりあげました。文章先生が遺された紙がたくさんありすぎて困るのよ、と章子先生がおっしゃっていたことがございます。決して日本の紙だけにかぎらず、アラビアの紙とか、そんなものまでたくさん集めていらっしゃったようです。その後、その紙文献がどうなったのかということをおは存じませんが、またどなたか有効な使い方をして下さるといいな、と思います。

まだまだ申し上げるべきことがたくさんあると思いますけれども、ひとまず私の話はこのくらいということにしておきます。今日は寿岳章子先生の学問と作品ということで、著作をみてまいりました。もう少し深くお話ができればよかったんですけれども、一番面白い「雁（がん）と雁（かり）」の話、これはぜひお話しておきたかったものです。本当に今日はどうもありがとうございました。

（文字おこし・長野裕子）

「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」

甲南大学教授 中島俊郎

本日の講演は「寿岳文章・しづ夫妻が問いかけたもの」という演題であるが、その内実を翻訳、向日庵本という分野において、しづ夫人が果たした貢献を考察し、夫婦が世に問い直したものが何であったかを考えていきたい。これまで夫の文章については研究者から多くの注目を浴びてきたが、しづ夫人についてはごく一部からしか研究の対象としてなされてこなかった。よって、今回の講演ではこれまでの欠を補い、併走者としてのしづ夫人を検証の対象としてとりあげ、寿岳文章・しづ夫婦が「問いかけたもの」の本質を照射してみたいと願っている。

1. W. H. ハドソンの位置

寿岳文章夫妻の精神的な視座において中心的な位置をしめていた W. H. ハドソン (1841-1922) についてまず始めていこう。

現在も岩波文庫の一冊として版を重ねているしづ夫人が翻訳した『はるかかな国 とおい昔』は、1917年11月、コーンウォールのペンザスで入院していたハドソンが自らの幼少期の生活を書いてみようと思ひ書きはじめた自伝である。「病にかかってから二日目、小康も得たつかの間に、ゆくりなく幼年時代の追憶がよみがえり、それまで憶えたことのないほど鮮明に、はるかかなたに遠き忘れられていた過去を再びとりもどした」のであった。

共訳

文章から英語の読解の手ほどきをうけたしづ夫人は数年間をかけ翻訳し、昭和12年に出版された。しづ夫人に英語を教え、同書の意義を説いたのは夫の文章であった。つとに昭和6年、文章が同書を英語の教科書として出版していた事実はそれほど知られてはいまい。*Memories Sad and Sweet* というタイトルのもと、京都の平野書店から出版された。同書には15歳のハドソンが腸チフスに感染した恐ろしさが詳しく叙述されている。32歳の文章、妻とともに4歳の長男、潤がチフス患者となって半年間入院を余儀なくされた体験と重なり、「年があらたまり、やせ衰えたからだを杖に托し、四ヶ月ぶりに教壇に立ったとき、たまたま講読したのがチフスのくだりだったので、一言一句が身にしみ心にこたえ、よけい感銘が深かったことを、まだきのうのようにおぼえています」(『自然・文学・人間』)とは、文章自らの述懐である。その後も文章は、この教科書を増補して、*Far Away and Long Ago: A History of My Early Life* として、昭和14年に開隆堂から再び出版している。つまりこのハドソンの自伝文学は、夫妻にとって愛情おく能わざる書であったといえよう。

W. H. ハドソンの生涯

さて、寿岳夫妻をとらえて離さなかったハドソンという作家はどのような人間であったのであろうか。ハドソンの人間像と夫妻を交差させることでまた新しい視座が得られるであろう。

ウィリアム・ヘンリー・ハドソンは、1841年、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスから離れた寒村キルメスで生まれ、草原が天空につづくようなパンパスのなかで羊飼いや、牧夫（ガウチョ）とともに暮らし、鳥と蛇をこよなく愛する自然児であった。「家の前には限りなき大草原が広がっており、裏にはラ・プラタ河に注ぐ広い流れが深く落ち込み急傾斜していた」という。鳥を収集し、その生態を詳しく記録し、発表した。ダーウィンなどから高く評価され、鳥の学名にハドソンの名前が二種類までもついている事実を想起すれば、その傾倒ぶりが理解できよう。ともあれ自然はハドソンの精神的発展の磁場であった。

1874年、32歳のときハドソンはイギリスへ移った。だが、そこには博物学者として受け容れられるような余地はもはやどこにもなかった。以後18年間、ロンドンにおいて赤貧洗うがごとの困窮生活をおくらざるをえなかった。そして、転機は1892年におとずれたのである。

『ラ・プラタの博物学者』（1893）の出版こそハドソンの文学者としての出発点であった。しづ夫人はこの著作も訳している。ラ・プラタの生活と鳥類の生態、習性をあますところなく書きしるし、ギルバート・ホワイト（1720-93）の『セルボーン博物誌』（1789）以来の自然文学に新境地を拓いたのである。「自分が記録する価値があると信じるもののみを選んだ」（「序文」）博物誌は、全二十四章からなるが、まずパンパスの豊饒を現出させ、そこに生存するあらゆる動物を描き出し、個々にまつわる珍談奇談を開陳していき、この未知の世界の住人になっているような感興に浸ることとなる。生物の単なる観察ではなく、読者はともにそれらと生きることになっていく。犀利な科学者の眼と、科学的興味をこえた文学者の情感が融合・合一された、これまでなかった世界を創出することに成功したのであった。

寿岳文章の新たな提言

夫人が亡くなった数年後、文章は妻しづが訳したハドソンの本文に沿って自らのコメントを付した『自然・文学・人間』（1973年、再版2002年）を出版したが、それは生物学者レイチェル・カーソンの環境への警告の書『沈黙の春』（1972年）への大きな共感の書にもなっている。だが、文章の本は汚染が進み、「春になっても鳥はうたわない」大地が出現してしまう恐怖を訴えようとするのを第一義にはおいていない。それは人間と自然の関係をもっと直截に語ってやまないものであった。人間は社会的存在であり、文明の生活者であるのだが、「小鳥や草木と同じく、明るい太陽の光と、きれいな空気や水、目にしみる若葉の緑なくしては、けっして健全に生きられない自然的存在である」という堅固とした人間=自然論を示唆している。

自然愛

さらに文章は「自然愛」について詳述していく。「人間は自然を征服し、支配したといわれますが、それは、人間が自然にたいして乱暴なことでもできるということではなく、自然の法則を発見し、自然の心をつかんで、自然の道理にしたがい、自然の一部を作りかえることができるようになったということです」と議論の大前提を語り、「このかけがえのない地球の自然の健在を前提に、人類の文明は発達してきたのですし、自然の脅威を克服し、自然にたいしてより自由となるなかで、自然を恐れるよりは、心ゆたかに自然を愛することができるようになったのです。自然を愛することは、趣味やアクセサリではなく、詩人だけがもつ心情でもありません。人間を愛し、人間らしく生きることに望みをもつすべての人びとに芽ばえる、それこそごく自然な感情なのです」と結論づける。

愛国者

そして文章は独自の愛国論を展開していく。文章の言う愛国者は、自然を破壊するような人間はいかに英雄であれ排除される。文章の愛国論に注目してみよう―「私の考える本当の愛国心とは、縁あって生まれ育った国の風土への深い愛着、そしてそこに住む多くの人たち、つまり人民大衆の、その日その日の平安としあわせを願う熱い心であって、絶対に戦争の起爆剤とはならず、まして、自国と他国とのあいだに目に見えぬ垣をつくりがちであった愛国心の通念とは、全く異質であり、無関係です。かけがえのない地球の陸と海と空の自然、その地球の広い底辺に住む何十億もの人民大衆への、いつも開かれている心の通り路、それが私の考えている愛国心なのです。日本についていえば、地震国は地震国なりに、太古からあった自然の景観、どこからきたにせよ、この国について狩猟や農耕にいそしみ、中央集権的な国家体制に組み入れられてからのちも、いのちをつなぐために黙々とそれぞれの労働に従事してきた名もない人民大衆。この自然と人民の大きな存在を、どんなときにも忘れず、自然と人民の立場に身を置いて、どうすればこの二つの基本的な存在が保全されるか、そのことへの深いいつくしみ。それをおいてほかに愛国心はありませんし、またあってはなりません。愛国とは、ゆがめられやすい国の体制を守ることでなく、国の自然と人民を守ることなのです」(『自然・文学・人間』)。じつに明快な愛国=自然論ではないか。

自伝文学

最後に『はるかな国 とおい昔』が何ゆえに傑作となっているのか。それはふたつの文学ジャンルのみごとな混淆にあった。英文学者、寿岳文章はその「奥義」を明かしている。

「自叙伝が文学として成功するには、主観が勝ちすぎても、客観的になりすぎてもいけません。主観が勝ちすぎると、自分におぼれて形がくずれ、読者とつながる糸が切れてしまうでしょう。逆に、客観的になりすぎると、その人ならではの滋味が失われ、報告や記録でしかなくなってしまいます。作者の個性がいつもあざやかな焦点に位置し、しかも作者をとりまく客観的なできごとも、ちゃんとレンズの中に収まっている。これが、自叙伝文学の成功する秘訣です。柔軟な心のもちぬしで、多様と調和にいつでも適応できたハドソンは、自叙伝を書くのに、うってつけの資格をそなえていました。わが心のかげを追う、ゆたかな感受性にめぐまれていながら、同時に、外部の世界へ、ゆきとどいた観察をくだすことができました。」

翻訳者としてのしづ夫人の資質をここで考えざるをえない。昭和初年、岩波書店から出した創作集『朝』はみごとな自叙伝であった。名作が名訳者をえたゆえである。

訳文の検討

では、次にここで一步踏み込んで名訳の秘密を解き明かしていこう。翻訳は訳文以外には何もなく文章がすべてである。つまり表現につきる。ハドソンの英語原文を示し、しづ夫人の訳文を次において検討してみる。

“Among our old or ancient trees the peach was the favourite of the whole house on account of the fruit it gave us in February and March, also later, in April and May, when what we called our winter peach ripened. Peach, quince, and cherry were the

three favourite fruit trees in the colonial times, and all three were found in some of the quintas or orchards of the old estancia houses. We had a score of quince trees, with thick gnarled trunks and old twisted branches like rams' horns, but the peach trees numbered about four to five hundred and grew well apart from one another, and were certainly the largest I have ever seen. Their size was equal to that of the oldest and largest cherry trees one sees in certain favoured spots in Southern England, where they grow not in close formation but wide apart with ample room for the branches to spread on all sides.”

[老木古木の中でとりわけ桃の木は、二月三月いやもっと遅く、四月五月、私たちが冬桃と呼んでいるのが熟するころに、果実が食べられるので、一家中の気に入りになっていました。桃とマルメロとオウトウは、植民時代での愛好果樹の三幅対で、三つながら皆、古い牧農場の果樹園などによく見いだされました。節くれだった幹に、雄羊の角のように曲がりくねった枝のマルメロが、家にも二十本ばかりありましたけれど、桃の木は四五百本もあって、一本ずつゆったり間隔をあけ、思いきり成長していました。確かに私が見た木のうちで、一番大きかったです。その大きさは、南部イングランドのよくこえた土地のどこかで、所狭しと茂り合わぬよう、四方へ十分枝をのばせるだけの余地を、たっぷり取って生えている、あの古い大きなオウトウの木に相当しておりました。]

この訳文で気がつくのは漢字と平仮名のみごとなバランスである。ふつう「です、ます」調は単純にながれて平板になり、冗長になるものだが、漢語（「三幅対」など）の絶妙な配置で、その弊を逃れている。凡百の翻訳者ではこうしたバランスを制御できない。結果、文はじつに読みやすく脳裏にとどまり、視覚的な喚起力にとむ訳文ができあがったのである。

次に作品の終結部に注目して訳者の妙技をさらに検討しておこう。

“Only I know that mine is an exceptional case, that the visible world is to me more beautiful and interesting than to most persons, that the delight I experienced in my communings with Nature did not pass away, leaving nothing but a recollection of vanished happiness to intensify a present pain. The happiness was never lost, but owing to that faculty I have spoken of, had a cumulative effect on the mind and was mine again, so that in my worst times, when I was compelled to exist shut out from Nature in London for long periods, sick and poor and friendless, I could yet always feel that it was infinitely better to be than not to be.”

[ただ私は、私の場合が、例外的なものであること、目に見えるこの現実世界は、世の常の人びとにまして、私にはもっと興味多いものに見えること、自然との交わりにおいて、私が経験した喜びは、あとかたもなくかき消え、ただ、はかない幸福の思い出だけを残し、現在の苦痛を、いっそう激しくさせるものではないこと、をよく知っています。自然との交わりがもたらす幸福は、決して失わ

れるのではなく、私がお話しした、あの機能のおかげで、私の心に及ぼす力を、だんだんと増し加え、再び私のものとなるのでした。だから、長い長い間、自然との交わりを断たれて、ロンドンに住み、貧しく、友もなく、病気がちの日々を送らねばならなかった私の最悪の時代でさえ、なお、生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私は、いつも感じる事ができたのです。]

ハドソン独特のアニミズムともいえる宗教にも似た境地が開陳され、この名作が締めくくられる。自然は人間の精神を快癒させる力をもつ。この作品がエコロジー文学の傑作に数えられるゆえんであるが、訳文の最後に訳者の真骨頂が表されている。「生きていないよりは、生きているほうが、ずっとずっと、はるかによいと、私はいつも感じる事ができたのです」という、あえて平仮名を過多にした訳文は、平明で口ずさむようなリズムに富み、『はるかな国　とおい昔』というタイトルそのものが織り込まれていて、読者に忘れがたい印象と記憶をもたらすのである。訳者にこの人あり、とでも言えようか。

母と娘

長女、章子はそうした母の臨終を描いた冷静でいて感動的な一文を残している。母の死を前にしてできるだけ客観的に記述しようとする抑制のとれた文体は逆に真情を強く訴えかけてくる。母であるしづに「ね、母さん、母さんの人生で何が一番よかった？」と訊ねると、意識がとぎれるなかで、はっきりと応えが帰ってきた—「パパさんと一緒になったこと、それが母の人生での最大のよろこび。父もうるんだ目で母を見やっている。母の穏やかな表情。やがては永遠の別れをせねばならぬ人との、それは最後の至福のひとつときであった。老いて、死んでゆくことの意味のときあかしがそこにあった。人は生まれ、そして死んでゆく。考えようによっては、死ぬ為に生まれてくるのかとさえ思われるほど、人生とははかないものだ。だが、そのはかなさをこのうえない光輝で染めあげることが人ではできる。ひとりの男とひとりの女の出会いのために人生があることもあると母は語ったのだ」(「忘れえぬ母の死」)。

人間がおくる人生というものをしづ夫人は、娘に対して集約した形で示した人物であったようだ。

「それほどえらかった人ではなかろう。しかし、一心に生きた人であった。その誠実さが後に残された者たちの思いを一そうかきたてる。私はやはり、母から、生きるとはどういうことなのかをおそわりつづけてきたような気がする。ささやかな人生にはちがいないが、そのささやかさの中に人はどれだけのものをこめることができるだろうか。母の一生はそのことを語ってくれるように思う」(「母のおくりもの」)。

「一心に生きた」、「誠実さ」を重ねた人生であったが、しかもとりたてて語るほどの一生ではなかったが、その「ささやかな人生」こそ大正、昭和を確実に生き抜いた日本人女性のありのままの姿ではなかったか。

今日では向日といえは桜を想起するが、どうやら桜は当初から向日の町にあったようではなかった。

「父と母が若い時分ががんばって建て、今なお私が父とともに住みつづけているその家のある住宅地は、昭和初期にはにせアカシアの並木であった。生命力の強い木で、どこの庭にもトゲのあるかなり荒々しいものがだんだん増えてきたので、住民は恐れをなして並木は桜に代わった。しかし、小学四年生だった私は、新しい家にひっこしてきて、まず並木のその木々に心ひかれていた。ちょうど白い花房が枝々に見られるころだった」(「母の病跡」)。

「にせアカシア」から「桜」への転換は、何やら寿岳家の歩みを樹木で表しているかのようである。

2. 協働の美一向日庵の本

文章は全力を傾けてつくり出した私家版の向日庵本に「茶の実」を象徴として刻印した。それは家の紋という以上に向日という土地との結びつきを表そうとしたものであった。「茶の実」は、家の花と同時に向日への愛を示すものである。「茶は私の家にとりわけ深い関係ができていた。私版本を度々出していた私の父は、自分の家の橘、母の家の桐とは別に、何か新たに寿岳の家の人生を象徴するような紋をもう一つえらびたいと思っていた。京洛の地にとりわけ関係深い植物。そして昭和八年に両親が居を定めた向日町のあたりにも、農家の庭先に大てい茶の木が見られた。こんもりして、場所も取らず品のある灌木。新しい我が家の庭にも、中心の松の木下に一株の茶の木が植えられた。その茶のふっくらした実が、日本の紋所の一つに採用されている美しさを父はよしとして自分たちの文章の活動のシンボルに借りてきた。いわば家花である」(寿岳章子「家の花」)。

向日庵本の美しさ

今日でもなお書物工芸の世界で高い評価をえている向日庵本は、デザインとか本の材料である和紙の美しさを超えて、二人の人間の協働作業から生まれた結晶であることが理解されてくる。だから、表面的な「本の美しさ」ばかりにとらわれてはいけぬ。

「そして父の仕事は、客観的に見てすぐれたものであることは、内輪ぼめのそしりを受けることなく多くの人に認められてもらえるだろうが、向日庵本の特色は、その個性ある美しさという結果論に終始するだけではない。それこそ、内部の人間の私が何かを述べることの意味として声を大に語っておきたいのは、それが寿岳文章、しづの二人がいかに生きたかということと深くかかわっているという点にある。」

向日庵本の真の美しさは、人間の親和に求められるべきなのである。

夫人の貢献

そして愛書家や研究者は向日庵本の本質が文章の造本意識にあるようによく断定しているが、それは片手落ちの見解といわねばならない。ウィリアム・ブレイクのように、彩色をほどこしていたのは、妻しづが手ずから施していたのである。この事実はけっして看過してはならない。じつに重要な現場を伝える報告がある。

「向日町に移ってからの両親の活動ぶりはすごかった。チフス罹患騒動ですっからかんになり

ながら建てた家の借金がえし、親戚や実家の面倒見、母のよく言っていたことばであったが『ほんとにどうなるかと思った』ようなすさまじくさえある仕事ぶりであった。父の八面六臂ぶりもさることながら、私は母のはたらきぶりを評価せずにおれない。かなり膨大な家事、そしてその時かなり身を入れていた翻訳の仕事、そしていよいよ脂の乗ってきた私版の仕事。学校から帰ってきた私の目に映る母の姿は、しばしば次のようなものであった。

鏡台と、衣桁と、本箱と机以外には何もない簡素きわまる六畳の母の居間。しかし窓外の緑は濃く、夏は愛らしいさるすべりの紅い小花がちりちり揺れ、冬には八重の班入りの椿の花がぼったりと重い。その窓に向かった机の上で、母はブレイクの『無明の歌』や『セルの書』の彩飾にふけていた。机上には水彩のパレット、細い細いたくさんの筆。原本はイルミネイテッド・プリンティングとやらで、いささかねっとりしてはいるが、ミュアのレリーフ・エッチングにたよって彩飾してゆく母のいろどりは日本の華奢な女人の水彩にふさわしく、淡くさわやかであった。そっと覗けば、そこにはかわいらしい羊や、五彩にきらめく夜明けの空などがあった。実に美しくまとめられていた。」(寿岳章子『永遠の水汲むわが母』)

この夫人が奏でていた「細密の手わざ」を技巧的な面でしか評価できない人は、向日庵本と無縁であると言わねばならないであろう。ブレイクは詩と彩色を一身でこなしたが、もっと深い意味での「画文共鳴」の境地が向日庵本にはあった。しかもそれは二人のつつまじやかな協働から生まれていたのである—「母の手彩飾の絵の横には父が心をこめて訳したブレイクのよきことば。その美しい仕上がりは、おそらくは夫婦が心をあわせて生きぬいていることのあかしでもあった。」

『紙漉村旅日記』の意義

数ある向日庵本のなかから何か一冊を選べと問われると、私は躊躇なく『紙漉村旅日記』を選びたい。滅びゆく日本古来の伝統と向かいあい、救うべく手をさしのべるのだが、それは高所からの物言いではなく、ともに慟哭し、生活者の目線でもって追究し、最期の息を看取ろうとする試みでもあった。

「向日庵本の最後は『紙漉村旅日記』である。あの悲惨きわまる十五年戦争の末期によくもこんな本が出たと思わずにはおれない。しかも、戦後ではもはや和紙生産の状況の激変でとてもあれだけのものは出来なかったであろう。材料をそろえ、印刷、製本、箱、万般の心くばり、職人さんとの連絡、戦火はげしい中での父の奔走も言語を絶する苦労であったろう。父は、和紙の世界に対する愛を、この本に凝縮した。装幀には白石の紙布、箱には油桐紙、内容は、妻と二人で日本中を歩きまわって得た紙漉き調査の記録。本文の用紙は富山八尾の雪晒し本高熊と佐賀の傘紙。もっとも美しく強く印刷の出来栄もよかった。全国から集められたさまざまの紙を、父は小さく切って、洋服箱をしきり、その中に種別に入れていった。母は病のせいでむくみがちな顔を蒼白にしながら、細い手先で絶対に間違いは許されないという要求に応じつつ正確に本文に貼りつけていった。虫くいをさけるため、貼付の糊は、装潢の名門、岡墨光堂に作ってもらったこんにゃく糊である。当時私は東北大に行っていた。冬休など帰省してみると、母がまっさおな顔にらんらんと輝く目を据え、全く火の気のない北向き三畳のへやで、その仕事をしているのであった。見ていてこっちの息がつまるきびしさであった。しかも、いい

かげんにしたらなどは口が裂けても言えぬ一途の打ちこみぶりが母に一種の後光を作っていた。向日庵本は、こうしてまさしくある夫婦がいかに生きたかの検証者となった。長い間そばでみつづけた子から見て、私はそれを稀有のわざと思っている。」

戦後よく指摘された「日本回帰」というような言葉でもって表現しつくせないほどの内実が本書からはにじみでている。戦後を生き歩くことになる日本人の原動力が紙漉者に認めることができよう。文章夫妻は生きる指針として、「生活」を基準にしたが、日本人の生活が本書にはことごとく封じ込められている。そして長女が指摘している意味で、向日庵本は、「ある夫婦がいかに生きたかの検証者」そのものである。

人生という織物

寿岳家が織りなした文化の波紋が家庭の生活を基調としていると指摘したのは鶴見俊輔であったが、その家庭の中心に核として存在していたのは、まぎれもなく妻であり母としての「しづ」であった。「私の家の特色は、時にはどんなにさわいでにぎやかであっても、それが無節操とか放漫とか、頹廢とかに結びつかなかった。健康、信頼、理想、そんな世界への志がどこかに一種の倍音のようにある家庭で、ぴしっとした雰囲気があるようであった。それはすべて母が織りなした人生の織物の基調であった」。—その女性は小さな身体であったが、大きな人間であった。

3. 寿岳夫妻が問いかけたもの

『寿岳文章・しづ著作集』の第2巻は『ある夫婦の記録』と題され、夫婦でつちかってきた人生、生活の記録となっていて、夫婦という複数の個がどのような問題を対象に検討してきたかが、じつに明瞭にその在り方が示唆されている。この巻に夫妻の「年譜」がおかれている構成からみても、本著作集全6巻の中心を占めているのがわかる。よって夫妻の「意見」がよく理解できるように、潤色をまじえずにこの巻からの引用によって、文章夫妻の姿を浮きあがらせてみたい。

「夫と妻の公開状」

まず、「夫と妻の公開状」からはじめてみよう。

「最近私たち夫婦が出したリレー随筆集を読んで、評論家の細川忠雄氏は、私たちを「自由に読み、自由に考え、自由に語る——自由人夫婦」と評されたが、まさしくその通りである。私たちは、どのような世俗の権威にも屈せず、どのような固定観念にもとらわれず、この目で、この心で、ありのままにものをとらえ、ものを見ようと努力してきた。恐怖や飢餓からの自由にしても、思想や言論の自由にしても、この努力なしには得られないだろう。」

自由というものが与えられるものではなく、熾烈な葛藤から不断の努力により初めて獲得できるものだと理解されてくる。

ふたりの出発

では、文章夫妻はどこから出発したのであろうか—「私たちの場合、純粋に思いつめた恋愛が序曲であり、その序曲はきわめて自然に、結婚へと導入されていった。お互いに相手の誠実を見ぬい

ていたから、私たちの決意をゆさぶる障害はなかったし、たとえあったとしても、私たちは動揺しなかっただろう。誰もが私たちの純粹さを祝福してくれた。だから私たちは、とにかく雑音がまじりがちな世間なみの結婚式を挙げず、婚姻の事実を告げる簡単な通知を近親や友人に送っただけで、二人きりの家庭を作った。」そしてその結婚は美しい言葉で力強く語られている—「愛は焦点を求めて集中する。外へ放散せず、内へ凝縮する。そして真の自由は、人の目に不自由と見えるものからでさえ、かち得られるのではあるまいか」、と。

でも、結婚は全く合い知らぬ対象が融和されていく過程でもある。だから未知の配偶者がどのような人間であるのか、もっとも関心が注がれるゆえんである。文章はこのような悩みを胚胎していたのであった—「封建制の強い田舎の、しかも結婚を本質的に不自然とする仏寺に生まれ育った私には、自分では相当に反省したつもりでも、知らぬまに人間らしさを疎外する一種のコンプレックスが残存していたかも、あるいは今なお残存しているかもしれない。妻はそれをどう受けとめ、どう対処していたか、彼女から私が聞きたいのは、まずそれである」という疑問を発している。

強靱な精神

それに対して妻は、「すでに夫が書きましたとおり、私たちは誰にもたよらない自主独立を、結婚生活の第一歩から実行しておりました。これを貫き通すには、強靱な精神と、経済面では幾らかの、少なくとも二、三年の生活費の用意が必要でしょう。職場で抵抗しなければならぬゆがんだことや、がまんのならない事件が発生したとき、多くの人が家族や生活のためにくじけてしまう話をよく聞きます。私は夫に、できればそうしたみじめな苦悩をなめさせたくないと思い通してきました」といった、配偶者を支える「強靱な精神」と生活に資する経済力を自らのなかで用意していたのである。

自然の治癒力

とにかく闇の中で青春の彷徨をくりかえす文章には出口がなかった—「父兄とはなんのつながりもなく、糸の切れた風船のように、孤独の空をさまよう私の青春時代は暗かった」が、そうした苦悩の治癒力となったのは自然であった。「それをともかくもくぐりぬけ、日のあたる場所へ定着させ、恋愛から結婚へと私をひとすじに引っぱっていった動力は何であっただろうか。いま思いかえしてみると、それはどうやら、私をはぐくみ育ててくれたいなかの自然、松や雑木のなだらかな山にかこまれた故郷の村であったような気がする」という言葉は、自己の精神的な展開を歌ったワーズワスの『序曲』の詩句といみじくも重なってくる—「その日ざしは暖かく、いろんな種類の小鳥が枝から枝へ飛びうつり、楽しそうに木の実をついばんでいた。その日もひまさえあれば山の日だまりに来て、私は心の傷をいやした。イギリスの詩人ワーズワスが、自己形成の最も大きな原動力を、幼少時の故郷の山村の自然に求めているのに、私は心から共鳴する。自然の景観から全く絶縁された都市の底辺によどむ気の毒な環境の青少年でも、空は澄み、日はうららかな自然のふところへ自由に飛びこめるなら、非行化への傾きの幾分かは是正されるのではあるまいか。現実はきびしく、このような願いは白昼夢にすぎないだろうけれど、私は自分自身の少年時代をふりかえってそう思うのである」。文章の自然への傾注はみずからの不遇な生い立ちから発していたのである。

どんためのおしづ

閑話休題。ここで話題は一転、しづ夫人の経済観に言及されていく—「今でこそ私は彼女を『どんためのおしづ』などとからかうが、平素、不時二段がまえの、彼女の不屈の意志力があつたれば

こそ、私は研究に必要な書物をおしみなく求めることができ、また壮年期、某百貨店の食堂管理の不備が原因で、私の一家を襲い、妻をあの世へ送る寸前まで追いこんだチフス禍を、くぐりぬけることもできた。数ヵ月にわたって、入院中の妻と私と子どもの三人に、五人の看護婦がつき、留守は家政婦がきりもりした。しかもその翌々年、私たちは、日あたりのよい現在の住所に、土地を求め、新しく家を建てたのである。」そして、ここに初めて文章夫妻と向日の町との必然的な出会いが生まれるのである。

戦争と平和

こうした夫妻はどのような生き方を選択していったのであろうか—「何よりも平和を優先させ、自由に生きることを願う私は、当然、多元主義の立場をとる。獅子と牛を同一のおきてで律することはできない。悪でないかぎり、各人にはそれぞれの考え方や生き方が許されなければならない。その意味で、妻も私も、また二人のこどもも、それぞれのパーソナリティを發揮する、完全に自主独立の自由人である。そして少しもお互いの間はぎくしゃくしない。」ここに市民から提言された平和論の要諦がある。個人という個を深く尊重し、複眼的に微視と巨視を自在に駆使し自由という独立したポジションを得る。自由はみずから掴み取るものだという姿勢も鮮明である。

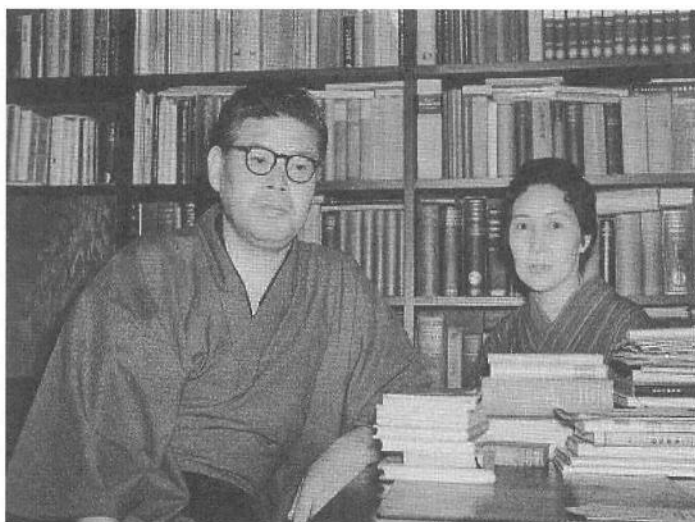
そしてこの対話は、あくまでも社会と家庭は不即不離の関係にあり、身近な家庭をいたずらに尊重するのは、偏重した考えであると糾弾される—「にもかかわらず、私たちが『似たもの夫婦』の印象を与えるとすれば、それは私たちの思考や行動が、同じ核を中軸として同心円的にひろがってゆくからだと思う。自分ひとりさえ、自分たち夫婦さえ、あるいは自分たちの一家さえ無事平穩に暮らせたなら、社会にどのような問題があろうと、人民大衆がどんなに苦しんでいようと構わない、あるいはやむをえないとする閉鎖的な態度は、私も妻も我慢できないのである。学者と呼ばれる人々には、こういう独善主義者がわりに多いのではあるまいか。」個は全体があって活かされるものであり、けっしてその逆ではないことが鮮明に打ち出されていて、寿岳家の「家庭哲学」が生半かな脆弱なものではないことを示唆している。

現在、憲法改正論議がかまびすしいが、文章の透徹した提言を、一家を挙げて提唱する意義を私たちはどのように聴くであろうか。

「戦後に制定・実施された日本の憲法は、国際紛争の解決手段としての武力による威嚇や武力の行使を、永久に捨てたことにおいて、今まで人類が作ったどの憲法よりも崇高であり、この憲法の完全な保持意外に、日本が過去に犯した侵略戦争のつぐないはないと私は信ずる。また基本的人権を、侵すことのできない永久の権利として現在および将来の国民に与え、信教や一切の表現の自由を、だれにも保障している点において、明治憲法とは対蹠的に、人民大衆が考慮されていると私は信ずる。この憲法になんのかのといちゃもんをつけ、改正の名において煙硝くさい戦力復帰の線まで後退させようとする動きに対し、学問を本命とする私たちが、一家ぐるみあらゆる機会に危険信号をあげるのも、社会に目を向けずにはおられない親子として当然であろう。」

「いちゃもん」という方言には微苦笑を誘われてしまうが、事は笑い事ではすまされない。背筋を伸ばして拝聴すべきことなのだから。どうやら寿岳家が発した数多くのメッセージの根底には、戦

争はどのような理由があれども、ぜったいに忌避しなければならないという「平和論」があるようだ。危機が迫れば、後世はこの視座を幾度も検証することになるであろうと私は信じる。



壽岳文章・しづ夫妻 文章が『セルボーン博物誌』を訳した頃
(壽岳和子『地上の星座』より)

「寿岳文章先生、和紙文化国際化への貢献」

和紙造形作家 伊部京子

1900年生まれの寿岳文章は、近代和紙研究啓蒙の嚆矢の人であった。英文学者、書誌学者などいくつもの顔をもつ知の巨人であったが、終生和紙を愛し、工業化の進展とともに漸減の一途をたどっていた和紙の復権に貢献し続けた。

寿岳の和紙への関与を年代的に見ていくと、初めて和紙を使い刊行したのが、1931年の雑誌『ブレイクとホキットマン』であった。この雑誌はブレイクの研究者であり民芸運動の創始者である柳宗悦の発案依頼によるものであり、寿岳は柳のウィリアム・ブレイク百年忌記念の展覧会開催、『キルヤム・ブレイク書誌』の出版にも参画していた。

寿岳は1922年、ブレイク研究のために柳を東京に訪ね、1923年、柳が京都に移住してから親交を深め、民芸運動に深くかかわるようになっていく。

新村出への師事も同じころで、柳、新村は寿岳の和紙研究啓蒙に積極的にかかわり、終生、支援し続けた。柳も寿岳も和紙を研究の対象とするだけではなく、和紙を慈しみ、生産現場に足しげく通い、洋紙との価格競争で疲弊していく和紙の産地に目を向けて、その復権に情熱をもって臨んだ。西洋式の印刷術に見合った和紙を産地と協力して開発し、率先して使い、消費を喚起しようと努めた。柳は寿岳に先んじて1922年すでに和紙を使った三冊の書籍を出版し、1931年創刊の雑誌『工藝』は和紙を用紙として刊行した。ブレイク、英文学の部分で柳という国際派の知識人と分かち合っていたことが、寿岳の和紙啓蒙活動を方向づけたと思われる。

1929年、ハーバード大学の日本文化研究者ラングストン・ウォーナー博士が来日、柳はその招聘で渡米し、ハーバード大学の理事であるカール・ケラーと出会い、ドン・キホーテの日本語の本の収集依頼を、寿岳に取り次ぐ。それが後に芹澤銈介の挿絵による稀覯本『絵本どんきほうて』の出版として結実することとなる。1930年までの寿岳は柳に触発されて、和紙啓蒙の活動範囲を海外へも広げはじめた時期であったとみることができる。

寿岳に今一人終生のロールモデルとなる人物があった。それはアメリカの手漉き紙研究家、アーツ・アンド・クラフツのデザイナーであり、私家版の制作者ダード・ハンターであった。寿岳がいつハンターの活動に注目し始めたかは記録からたどることはできない。1883年生まれのハンターは1930年代までにすでに紙のみならず、フォントまでを自作した優れた私家版発行で高く評価されていた。先に挙げたカール・ケラーはハンターの私家版を愛し、限定本の早い番号を入手することに情熱を燃やしていたということなので、柳を通しての関係であったかもしれないと私は推察する。

ハンターとは文通していたことを寿岳は語っているが、日本への旅について書いている「紙とともに生きて」には寿岳との出会いについての記述はない。筆者はアトランタ・ジョージア工科大学付属の Robert Williams American Museum of Papermaking で、ダード・ハンターの収集した資料の中から、寿岳文章との出会いに関する記録を探したが、限られた時間で見つけることはできな

かった。

ダード・ハンターの伝記 *By his own Labor* の著者キャサリン・ペーカーは、ダード・ハンターの孫の招きで、Mountain House で、手つかずのまま、何万点もの資料が保管されていたことを知ることになった。それらの整理に1992年以降取り組み、2000年に伝記を出版した。向日庵にはハンターからの手紙は残されていないが、Mountain House の資料に壽岳文章からの手紙が含まれているに違いない。

ダード・ハンターは1933年 *Papermaking Pilgrimage, Japan, Korea and China* 執筆のため来日し、壽岳とは京都で1日を共にした。その感動を壽岳は「あのハンター」と感嘆を込めて記録している。この年壽岳は向日市の新居向日庵へ移り住み、向日庵本の出版、「向日庵消息」を発行し始めた。同年、『工藝』28号が和紙を特集し、柳が「和紙の美」、壽岳が「和紙復興」を書き、和紙啓蒙を高らかに謳い上げた。

1937年、今一人の師、新村出と図りあい、和紙研究会を組織し、雑誌『和紙研究』を創刊した。同年新村の推薦で有栖川奨学金を受給し、3年にわたる紙漉き村旅日記の現地調査に取り掛かった。私家版刊行、調査旅行にもとづく出版ともに、ダード・ハンターが世界規模で実施してきたところであった。英文学者でもある壽岳が和紙の海外での評価を熟知し、和紙の海外への紹介を念頭に置いていたことは疑いえない。1942年、*Hand-made Paper of Japan* を Tourist Library から出版した。

戦後 外国人来日が盛んになるに従い、和紙に興味をもって壽岳を訪ねる外国人が輩出した。アメリカではダード・ハンターの影響下、直接日本で手漉き紙を体験した戦後世代によって、アメリカでも手漉き紙への関心が高まり、新しい芸術の領域として、手漉き紙に注目する芸術家が輩出し始めた。ダード・ハンター第2世代によるこの活動は手漉き紙のルネサンスと呼ばれ、世界へと広がっていくことになった。

1970年代に入ると、こうした芸術家たちが、技術研修と情報交換のために、会議を開き、日本の手漉き紙の匠がアメリカに招聘され技を披露する直接交流が始まった。

1978年には、あらゆる工芸を縦断して、世界のものづくりが集う「世界クラフト会議 (WORLD CRAFT COUNCIL '78 KYOTO 通称 WCC KYOTO '78)」が開催され、和紙は日本の誇る一部門としてプログラムを実施した。当時は紙以外の他ジャンルの伝統工芸に新しい造形手法を導入することが盛んで、陶芸、織染工芸などが、日本のお家芸として世界から注目されていた。WCC は日本の伝統工芸にとっての黒船だと言われたが、和紙の世界はまさに鎖国下の日本のように、伝統工芸の一分野として海外の動向とは無縁のままであった。そうしたところに海外の紙を素材とした斬新な作品と芸術家が大挙して紹介され、関係者に大きな衝撃を与えた。和紙の国際化はこのようにして始まり、産地と海外の芸術家、研究者との熱い交流が始まった。

壽岳文章が創刊し、1951年の第15号で休刊となっていた『和紙研究』が、壽岳の和紙研究を支えた森田康孝により復刊された。森田と当時文化庁の技官であった柳橋真とが壽岳の次世代の和紙啓蒙の担い手として産地への関与を深めていった。若手の育成と情報交換のため、全国に点在する手漉き和紙後継者に呼びかけ、手漉き和紙青年の集いを開催した。

1980年には、アメリカでタパ (Tapa 樹皮紙) と和紙の情報交換の会議が開催され、青年の集い

のメンバーがグループで参加し、アメリカでの動向を体験し、日本での会議開催を託されて帰国した。産地の若手を、京都での WCC の成功で生まれた産官学の連携組織が支え、1983 年、「国際紙会議'83 京都 (International Paper Conference'83 KYOTO 通称 IPC)」が開催された。

海外から 260 名、日本から 250 名の参加者があったこの会議によって、手漉き紙にかかわる文化活動は一挙に世界へと伝播することになったのである。

来日から 50 年、そして、ハンター生誕 100 年目の記念すべき年に、ハンター第 2 世代によって開催されたこの会議は、画期的なイベントとしていまでも語り継がれている。この会議に触発され、海外との交流で活路を見出そうという産地の若手が海外へとでかけ、また海外から和紙の産地に研修に訪れ、長らく滞在するケースもまれではなくなってきた。戦前には考えられなかったことが和紙産地の日常となったのである。晩年の壽岳文章は実行委員会の参与として、和紙業界のシンボリックな役割を担ったのである。日本での会議開催前後して、関係者の連携による組織が世界で発足した。

1981 年、ハンターの集めた世界の紙漉きにかかわる資料を収蔵するジョージア工科大学付属アメリカ製紙博物館 (通称ダード・ハンターミュージアム) を拠点として、“Friends of Dard Hunter” が結成され、現在も発展し続けている。

ヨーロッパでは世界組織である「IAPMA (International Association of Hand Papermakers and Paper Artists)」が 1986 年に結成された。2 年ごとに世界持ち回りで年次総会を開催していて、1995 年に京都で日本紙アカデミー主催の国際会議が開催された際、京都で同時に年次総会を開催した。2020 年には豊田市がホストとなり、再度日本での開催が決定している。

手漉き紙にかかわる国際交流が活発になるに従い、海外からの要請にこたえるため、1988 年に日本紙アカデミーが設立され、壽岳文章は名誉会員として参画した。会長を務めた壽岳の共同研究者であった町田誠之は日本紙アカデミーの精神と雰囲気は壽岳文章の和紙研究会をおよそ継承していると述べている。

壽岳文章が和紙に深く関与し始めた時からすでに 100 年近い年月が経過している。その 100 年は手作業でつられる和紙が機械生産の洋紙に次々にとってかわられる受難の時代であった。紙の生産は近代までは手作りであったことに洋の東西を問うものではない。機械紙の生産が始まると次第に手漉きにとってかわられた。しかし日本ほど、手づくりの紙が生産され続けている国はほかにない。IPC 以降日本でも和紙を基盤とした造形を手掛ける若手が輩出し、世界的なネットワークで活躍するケースも珍しくない。

和紙が今日あるのは、生産者の努力と相まって、官民ともに保存のためのさまざまな対策が講じられてきたからに他ならないが、壽岳文章の和紙復興にかけたさまざまな活動が和紙を洋紙とは違った特別に尊いものという認識を広め、日常的にそうした思いを共有できる文化基盤があることによるところが大きい。その価値は国内だけでなく、海外にも多くの美術工芸品に姿を変えて輸出され、海外の多くの美術館で収蔵されている。支持体としての和紙があったからこそその美術工芸であり、和紙の生産が続かなければ、そうした美術品もいずれは存続し得なくなるのだ。和紙の存在意義はここでも国際的に考えなければならないところなのだ。

依然として和紙の生産現場での厳しさは改善されたわけではないが、和紙を愛する気持が共感を呼んで、多くの人が産地を訪れる今日の状況は日本以外ではありえない。

和紙を基盤としたポスト IPC 世代の芸術家の活動も新しい活力を産地に吹き込んでいる。国際紙会議で和紙の国際化が一気に加速する前年に、壽岳文章は和紙の将来は国際化のなかでの展望を持つことであると語った。和紙復興を謳いあげてから 50 年後の壽岳の示唆するところはそれからの 50 年の方向を示す、羅針盤であったといえるだろう。

1933 年が和紙復興の起点であったとすれば、1983 年が国際化の起点であったとみることができる。その間 50 年、和紙啓蒙の中核を担い続け、なかでも、国際的な視点で和紙の未来を拓くことを提唱したのは、壽岳ならではの視座として、特筆に値する。

「壽岳潤氏の思い出」

京都大学名誉教授 今井六雄

京都大学に奉職していた今井六雄です。このような会に呼ばれて、大変恐縮しています。と言うのはこの会は壽岳一家の業績を検証する、ということですが、潤君とは最終の専門分野が異なり、彼の学問業績については詳しくは述べられませんので、この点はどうかご容赦下さい。

「梅檀は双葉より芳し」と言いますが、まずは彼の幼少の頃の思い出からはじめましょう。じつは、潤君は「じゅん」君ではなく「めぐみ」君なのですが、「みぐみちゃん」と呼ばれるのが嫌で、読み方を「めぐみ」を「じゅん」としたそうですが、「じゅんちゃん」でもあまり大差はありません。ただ、潤を「めぐみ」とは読み難いのは事実ですから。

二人とも京都一中に1940(昭和15)年度入学しました。席順にどのような学校側の思惑があったかは知りませんが、教室の座席では、潤君は列席の一番前に、私はといえばその列の最後の席に座っていましたから、私の席から彼の姿はよく見えました。入学後、二人とも天文同好会に入部し、潤君は太陽の黒点観測を熱心に行っていました。

この学校の校風は自由主義の気風がみなぎり、読書傾向ではいささか早熟していたようでした。英語の教師で先輩の秀才で新進気鋭の岡田幸一(おかだ・こういち)先生という方がおられました。自由主義的と言いましたが、この方は、次々と生徒を指名していくのですが、「次のまぬけ、次の凡人」とあけすけに指名し、容赦なく生徒を当てていきました。生徒はまた生徒の方で「はい、はい、秀才先生」と抜け目なく応じていました。ところがその岡田先生から潤君はそうした冗談めかして指名されたことはありませんでした。本人もしっかり勉強していたこともありましようが、岡田先生と京大英文科同世代の父上の壽岳文章先生の存在が後ろにひかえていたのではないかと付度いたします。

大阪は四ツ橋にある日本最初のプラネタリウムへいつも潤君と同行しました。また今も私宅の書棚にあります。ジェームズ・ジーンズ『我等をめぐる宇宙論』、エドウィン・ハッブル『宇宙膨張論』、アインシュタイン・フェルト『相対論』、山本一清『天文講座』などを愛読していました。私たちにさらなる刺激となったのは、1943(昭和18)年、まだ三十代半ばで先輩の湯川秀樹さんが文化勲章を受勲され、母校で講演された出来事でした。もっとも湯川さんは例の小声でしゃべられましたので、仮に大声であっても果たして聴いているわれわれが理解できたのかどうかは分かりません。

やがてお互いの家を行き来するようになるのですが、潤君のお宅へ訪れると、まず向日庵の知的雰囲気には圧倒されました。床の間の軸を見ると河上肇京大教授の書がかけてある。商家であったわが家にはない空気がみなぎっていました。そして、すでに翻訳家として一家を成して、高名であられたのに、ご母堂の静子さんが普通の家庭の主婦と何ら変わることなく、甲斐甲斐しくお世話して下さり、手厚いおもてなしを受けたことは忘れられません。

私はいつの頃か、オパーリン『生命の起源』に感動し、生命科学に興味をもつようになりました。

つまり物質がどうして人間にまで変化したのか、という生物の化学基本論です。

潤君と私との間にはこのようにして専攻が異なってきて、互いが少々疎遠になるようになりました。やがて潤君の方は数理科学をきわめるようになっていきました。

そして、学徒動員がはじまります。異なるクラス単位で実施されていました。私はたまたま学校の文筆コンテストの成績が非常によかったためか、三高の文科を受験してやはり取り止め、潤君とは学年の差ができてしまいました。やがて京大へ進学したときには同じ理学部でも天文学と生命科学とでお互いの専攻は分かれていました。

卒業後、潤君はフルブライト留学生に選出され、渡米し、アメリカのミシガン大学で博士号を取得します。私の方は大学院特別研究生となり、やがてイェール大学に奉職して研究員になっていきます。全く両者の行き先は異なったわけですが、それでも友好関係はたえず続いていました。二人は10年ぶりにロサンジェルスで再会を果たします。一時、京大へ帰るものの、潤君は後にカルフォルニア大学へ進み、また私とは別れることとなります。それでも70年間、潤君のことはたえず思っていました。

潤君は東京大学天文台に職を得て、ここで専門的な業績を数多くあげました。停年退官後は10年間、東海大学で研究を続けていきます。

そしていつの頃でしょうか。「結婚した」という便りが私のもとへ舞い込みました。天文学者は夜に仕事をするから結婚は不要だとうそぶいていただけに、驚きました。私の方は京大へもどり、さらに停年退官後は京都薬科大学で分子生物学を講義するようになっていました。最終的には2000年代から交友関係が再開しましたが、潤君の体調が低下してきたため、知人のいる東海大学付属病院に入院をすすめ、結果、入院してもらいました。

その後、多摩市の病院へ転院されます。私はここで見舞いに行き、議論を重ねるとそれぞれの専門性のなかの同一要因を見出しました。すなわち、宇宙空間における生物体の起源にまつわる生命科学分野では一致をみたのです。

こうした「見舞い会談」を通じて、私は潤君が終生の友であり、幼少の頃からの友情が結実したのを理解しました。潤君は国際天文学ユニオン、電波受信と望遠鏡で宇宙知性を観察するSETI（地球外知的生物体探査機構）などを通じて、アメリカをはじめドイツ、フランスの研究者たちとも親交があったようです。生命体の地球発生説にも関心がありました。

70年もの交誼で私と潤君とは、結局のところ、結論なき議論をたえずくりかえしてきたようです。ご清聴をどうもありがとうございました。

あとがき

寿岳一家の文化的業績について、ご家族亡き後、凍結されたままであることを案じた向日市在住の数人のメンバーが、2015年8月に研究会を結成し、2年余の間に7回の講演会を催してきました。本冊子はその時々にご専門の先生を迎えて行われた講演の記録集です。

その主たる成果を顧みると、まず一家の住居であった「向日庵」が、昭和の住宅建築の典型としては、指定文化財に値する建築であることが鮮明になったこと。

寿岳文章氏の英文学者、書誌学者としての幾多の業績が報告され、特に日本民芸協会の創立者の一員であり、美術工芸としての民芸研究はもとより、日本全国に亘る和紙の調査、その膨大な資料の蓄積と温存、和紙の国際的な次元での位置づけをなされたこと等がクローズアップされました。

またしづ夫人の翻訳家、随筆家としての文学的業績のご報告をいただきました。夫人は文筆活動を通じて向日近隣の自然の美しさ、とりわけ竹を賛美し、かつまた女性の社会参加の啓蒙にもつとめられました。

寿岳章子氏は、専門の日本語学や抄物の研究のかたわら、家族や京都の暮らしに関わるエッセイを残され、京都の街についての著書が現在の町屋ブームの魁（さきがけ）となっていること。地域文化、とりわけ乙訓への熱いまなざしを示されたことなどが明らかになりました。

寿岳潤氏については天文学者としての研究や人となりについてお話があり、改めて国際的な天文学者の姿が浮き上がりました。

これらは、寿岳家それぞれの方々の業績の記憶と記録が喪失される可能性を払拭する活動となったと考えます。

この活動を通じて、寿岳一家の思索の深さ、豊かな人間性、交流の広さ、行動のバイタリティーに唯々驚嘆するばかりであります。そして現在もなお、寿岳一家に寄せる熱い敬愛の念をいなく人々の多いことにも驚いています。寿岳一家の文化への思いの一筋の糸をたぐれば、長く強い蔓となって葉が生え、花が咲き、広く野原に燦然と輝く寿岳ワールドを見ることができると信じております。当初からの研究会と、ここに収められた講演は、今日のNPO法人「向日庵」の活動に繋がっています。

末文になりますが、ここにご登壇下さり、講演記録に目を通しご訂正、修正を加えてくださった講師の先生方、熱心にご来聴下さった皆さま方には衷心から感謝いたします。そして講演の録音記録から文字起しをしてくださった事務局の長尾史子、長野裕子両氏にもお礼を申し上げます。

一連のこうした活動に深いご理解とご支援を約束されておられた寿岳潤氏夫人の和子様は昨年未急逝されました。心よりご冥福をお祈りし、私たちの出発をゆるした本書をご霊前に捧げます。

桜のつぼみふくらむ初春の頃

特定非営利活動法人向日庵 副理事長 中村隆一